

西夏語『月々樂詩』の研究

西 田 龍 雄

一

近年、西夏語・西夏文字の研究は、急速に進展した^①。複雑な字形を具えた西夏文字は、その組織の解明自体が興味ある研究対象であるけれども、その文字の背後に秘められた西夏語という言葉の復元、そして西夏語による記録を通した西夏人の生活、西夏の文化などの探究は、それ以上に重要な研究課題として成立する^②。

西夏文字の組織の解明と並んで、西夏語の音形式、統語法や形態法の再構成は、現時点で、かなり進んだ段階に到達している。

中でも西夏語動詞がもつ二系列の接頭辞の機能や人称代名詞を接続した語幹形式の変化をはじめ、動詞句構造の研究は、これまで想像できなかったこの死語の特徴を明確にした。

その研究はいまも進行中ではあるが、比較言語学的な観点から見ても、西夏語は、すばらしい魅力をもった言語として、チベット・ビルマ語派の中に位置づけられたことになる^③。

現在残されている西夏語文献は、いずれも文章語として発達した言葉によって書かれているが、その文体は統一的ではな

たとえば、西夏文字 **𐽀** *khī'on* (平56) と **𐽁** *khien* (平42) は、同じ意味を表現し、一方は特定環境における変形なのである。⁽⁶⁾ 西夏語の一部の動詞は特定の環境で変形し、その各変形が独自の文字で書き表わされた。もし背後の言葉の組織が復元されていなければ、字形上弁別されるこの両者は、何らかの意味の上の相違を反映していると考えざるを得ない。西夏語の研究者の中には、前者は漢語の「与」で、後者は「授」で置き換える。最近中国で刊行された、『文海』と『文海雜類』の訳である『文海研究』では、そのような訳語を与えている。⁽⁷⁾ 筆者の「西夏文字小字典」(『西夏語の研究Ⅱ』所収)でも、前者を「与える、授ける」、後者を「与える」と訳していた。

実際には、後者の形は、**𐽂** *khien-hyah* 「私が与える」のように人称接辞をとまなう場合に限って出現する。したがって両文字共に、「与える」を意味すると見るべきであった。

全体で六千数百字ある西夏文字の中に、この種の関係にたつ文字は、決して少ない数ではない。

祈求・願望の接頭辞の場合、問題はやや複雑である。たとえば『法華經』卷六にある

𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿 寿をこの如く説かんと願う

では、接頭辞 *rie-*をとまなうて、*rie-tsheh* となっているが、同じ『法華經』卷七では、別の動詞で、

𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿 諸々の分身仏を各自の本土に還さんと願う

のように、接頭辞 *weh-*をもって、*weh-loh* と表現されている。この二つの接頭辞は一見すれば関係がないように思える。ところが、その形式を分析すると、上述の方向指示辞と同じ祈求・願望の接頭辞が融合した形式であることが判明する。

前者の *rie-tsheh* 〈説こうと願った〉は、**𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿** *rir-tsheh* (外部に) 〈説いた〉に対する **rir-ʔeh tsheh* の融合形 *rie-tsheh* であり、後者の *weh-loh* 〈還えそうと願った〉は、**𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿** *wih-loh* 〈還った〉に対する **wih-ʔeh-loh* から変った形式であると推定できる。現代羌語の願望形にも、類似した融合形がある。⁽⁸⁾ 西夏語では、祈求・願望の接頭辞 *ʔeh-* が先行する方向指

示辞と合一した形が、西夏文字一字によって書き表わされていた。従来、祈求・願望の接頭辞に六種類もあり、相互の機能の弁別に困惑したが、この融合の原則が判明して、形式間の関連が面倒なく把握できるようになった。

一般的に言って、字形上弁別された西夏文字によって書き表わされた形式が、西夏語のどのような弁別を反映しているのか、換言すると、西夏語という言葉の組織の中で、それぞれの形式がどのように位置づけられるのかが、言葉の復元に際して基本的なそして大きい問題として浮び上って来る。それは、文法体系のレベルにおいても、語彙体系のレベルにおいても、言葉のすべてのレベルで、いろいろの角度から考察されなければならない。

本稿で、筆者は、とくに語彙体系に関連して、この問題を、新しい資料の活用を通して検討してみたい。

二

西夏語の語彙は、まだほとんど体系づけられていない。かなり多量の西夏文字については、一字一字が表現する意味、つまり字義はかなりの程度に明瞭になっている。しかし、『同音』に登録されていても、どのテキストにも使われていないとなると、解読の糸口はなかなかつかめない。そのような文字も少なからず残っている。

そして、二字以上が連続して一単語として使われる意味、つまり詞義は、他言語形と対照できるとか、使われている脈絡から十分に把握できるのでなければ、正確につかめないことが多い。西夏語の語彙研究の重点は、個々の字義の研究から固定した結合の詞義の研究に移動しつつある。詞義が徹底して解明されなければ、文の正確な理解はおぼつかないことは言うまでもない。たとえば、敦煌の東に位置する安西（瓜州）に、榆林窟と呼ぶ石窟がある。

その中に西夏時代に書かれた壁画が数点保存されていて、西夏文字でその縁起が記録されている。かなり判読し難い状況

にあると思われるが、中国の西夏研究者は、その文字題起をよく書き出している。その題起の中に、**緡** **祿** という二字が人名に冠してしばしば出てくる。

王静如はこれを「善發」と読み、史金波らは、「善行」と読んだ^⑨。一字一字を漢字に置換えると、たしかに、それらの読みで誤りはない。しかしそれは字義の置換えであって、その詞義は別にある。この二字は一単語として、漢語の「比丘」に対応するのである。

以前、一九五八年に、私は天理図書館が所蔵する西夏文集録の中に、『無量寿宗要經』の断片があるのを発見した^⑪。この經典は、宋代にも西域一帯にかなり普及していたが、その西夏訳の存在はそれまで知られていなかった。

その西夏文はチベット語から翻訳されたもので、その中に、この善起にあたる文字が使われていた。これはチベット語の *dge-slong* を直訳的に置換えた単語である。つまり「比丘」である。漢訳から重訳された西夏經では、すべてが、『華嚴經』や『法華經』のように、漢語の比丘を音訳した **𑖦𑖯𑖱𑖨** *phih* (上10) - *khaw* (上40) が使われている。これは言わば、借用語形である。

このように単語としての意味の決定は、種々のテキストにおける用法を丹念にあたっていかなければならない。

緡 **祿** 低高は「階級」、**緡** **窶** 通名は「通称」、**緡** **祿** 悪趣（悪に向う）は「塗炭（水火の苦しみ）」にそれぞれあたるなどをはじめ、**緡** **終** 「然るに」、**緡** **終** 「然してのち」など分析し難い面倒な形も少なくない。

上にあげた比丘の例のように、仏教用語の訳語には、外部から借用した形式と本来の言葉で翻訳した単語が、ある範囲内で並存していたことは確かである。そのような並存関係は、仏教用語に限らず、西夏語の一般日常単語についても認められる。漢語からの借用語が相当多数西夏語に入っているのである^⑫。

たとえば **𑖦𑖯** *tsnu* (平1) と **𑖦𑖱** *mba* (平64) 共に〈粗い〉の意味であるが、*tsnu* は漢語粗の借用で、*mba* は本来の西夏語で

ある。『法華経』では、**𑖀𑖦𑖫𑖞**が一単語として、漢語の麤洪にあてられている。

𑖀𑖦 *ki^wan* (平26) と **𑖀𑖦** (音形式不詳) 共に卷の意味であるが、前者は漢語卷の借用形である。ほかに、たぶんチベット語の *theb* から借用したと考えられる **𑖀𑖦** *te^h* (上61) がある。**𑖀𑖦** の字形は、手偏に〈集める〉から作られている。¹³⁾

𑖀𑖦𑖫𑖞 *ʔdzih₂* (平11) - *ʔdzih* (平11) と **𑖀𑖦𑖫𑖞** *neh* (平36) - *loh* (上49) は共に親戚を意味するが、*ʔdzih₂* - *ʔdzih* の方は、漢語の親戚を借用した形で、*neh-loh* が本来の西夏語形である。

𑖀𑖦 *san* (平25) と **𑖀𑖦** *ɣ^war[ɣyar]* (平84)。漢語山を借用した *san* に対して、西夏語本来の形 *ɣ^war* がある。**𑖀𑖦𑖫𑖞** 須弥山、**𑖀𑖦𑖫𑖞** 妙高山はじめ、西夏三大山と言う **𑖀𑖦𑖫𑖞** 賀蘭山、**𑖀𑖦𑖫𑖞** 積雪山、**𑖀𑖦𑖫𑖞** 燕脂山は、いずれも **𑖀𑖦** で書かれるが、それに対して、**𑖀𑖦𑖫𑖞** 天屠山、**𑖀𑖦𑖫𑖞** *ɬɛ-ɬɛ* 山、**𑖀𑖦𑖫𑖞** *ʂon-ɬɛ* 山には、**𑖀𑖦** が使われている。

𑖀𑖦 *lew* (平43) と **𑖀𑖦** *nuf* (平4) 共に楼であるが、前者は漢語の借用形、後者は西夏語形である。

𑖀𑖦 *tshia* (平19) と **𑖀𑖦** *koh* (平49) 前者が漢語車の借用形であるのに対して、後者は西夏語本来の車である。

𑖀𑖦 *tsh^wan* (平26) と **𑖀𑖦𑖫𑖞** *ɲɛr-ɲɛr* (上82) 全と一切 *tsh^wan* は漢語全より借用した形と考えられ、それに西夏語形 *ɲɛr* が該当する。

この種の対照を示す語彙はなお少なからず認められる。そのほかに借用形式に特有の字形を考案することなく、別に固有の意味をもった字形を仮借して、漢語を表記する場合がある。たとえば、

𑖀𑖦𑖫𑖞 *ki-siuh* 急須、**𑖀𑖦** *tsiu* 鋤、**𑖀𑖦** *wah* (*mv^wah*) 瓦、**𑖀𑖦𑖫𑖞** *new-phah* 鑊鉞、**𑖀𑖦𑖫𑖞** *ngiew-tsih₂* 鑊子 (釘抜き)、

𑖀𑖦 *pah* 鉢、**𑖀𑖦𑖫𑖞** *xu-maw* 駙馬 (婿) などである。右の例はすべて『文海』『文海雜類』の注にあったが、この事実、西夏の都市生活において、漢語がかなり普及していて、とくに日常使う器具類は漢語で言うことが多かったため、その漢語形を西夏文字で音写して注記したものと考えられる。これらはいわば外来語の仮名表記にあたる。

また特定の韻類に属する形式に借用形が多いことも確かである。たとえば、平声十六韻がそうである。

𪛗^{x'ien} 分 𪛗^{tsh'ien} 寸 𪛗^{nen} 人 𪛗^{tsh'ien} 重 𪛗^{k'ien} 君 𪛗^{sen} 身

以上の事実を総括して言うと、西夏語語彙の中に、西夏文字による表記では特に弁別されないけれども、借用された漢語の層と本来の西夏語の層が、部分的に重複して並存していた。したがって、西夏語語彙体系の中で、各々の単語に対して、具体的にその評価を与えることができる筈である。

いま問題にした借用形式以外にも、これまで西夏語固有の伝承形と考えて来た同義・類義の形式にも、更に別の観点から特定の評価を与えることが可能ではないだろうか。たとえば、**𪛗**^{tsh'iw} (平47) と **𪛗**^{ndi} (平65) は共に〈述べる〉を意味する同義語と推定しているが、西夏語の語彙の中で、この両単語はどのような価値の違いをもっていたのか、果して両者の間に意味上の対立があったのか否か、これは語彙体系の研究にとって非常に重要な問題である。しかし、この提言に対して信頼できる解答を引き出せる根拠が、現存の資料の中に存在するだろうか。それが次に検討しなければならない事柄である。まず、西夏人の編集した西夏語の単語集について考察してみたい。

三

西夏人は、河西時代に、正しい字形と標準的な発音を普及する目的で、西夏語を整理した多種類の韻書を編纂した。⁽¹⁴⁾ 同時に、分類的な単語集も数種類作っている。

『番漢合時掌中珠』は、西夏語と漢語の対照単語集としてよく知られるが、それは民間で作られたごく一般向きの簡便な小冊子である。⁽¹⁵⁾

そのほかに『番漢語要集』⁽¹⁶⁾（推定書名）という西夏語と漢語の分類単語集や西夏語のみを特定の意味項目をたてて分類登録した『(三才) 雑字』⁽¹⁷⁾と七言の詩句の型で、ある意味範疇のもとに同義語類義語をまとめた『同義一類』⁽¹⁸⁾があった。

それらは、西夏語研究にとって極めて珍重すべき資料である。

『番漢語要集』は、蝴蝶装の断片二枚半を残すにすぎないが、各単語ごとに対応する漢語を西夏文字で音写し、注記する体裁をとっていて、漢字は一字も使われていない。

蝴蝶装の紙片の中央に略題として、**𐽀𐽁𐽂** 要集とあるところから、一般に要集が書名であるごとく扱われているが、筆者はその内容からみて、たぶん『番漢語要集』が完題であつたろうと推定している。

分類される項目全体はいまは正確には知り得ないけれども、現存する八（左半）、九、十葉が器具品五（推定）、楽器品六、花名品七に該当するから、全体の項目は大体察知できる。

また、この書物に収録される単語は、『番漢合時掌中珠』と重複するところが多い。あるいは、『掌中珠』が成立する（一一九〇）以前に、このテキストがすでに編纂されていたのかも知れない。

つぎに楽器品六と花名品七の部分を訳しておく。上段が原文で、続けて書かれていて、対応する漢語は割注の形で挿入される。

𐽀𐽁𐽂 𐽀𐽁𐽂

楽器品 六

1 **𐽀𐽁𐽂** **𐽀𐽁𐽂** 大鼓 漢語〔番〕 mbaf-kh³
𐽀𐽁𐽂 大鼓 〔漢〕 taf-k³ɕh

(掌) 326

2 **𐽀𐽁𐽂** **𐽀𐽁𐽂** 丈鼓 漢語〔番〕 he-mbaf
𐽀𐽁𐽂 丈鼓 〔漢〕 tsaf-k³ɕh

(掌) 326

11	10	9	8	7	6	5	4	3
𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏
𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏	𦵏𦵏
六絃	三絃	簫	七星	笛	笙	繩鼓	導鼓	和鼓
六 漢	三 漢	簫 漢	七 漢	笛 漢	? 漢	架 漢	鼓 引	和 漢
絃 語	絃 語	管 語	星 語	言 語	笙 語	鼓 語	言 導	鼓 語
〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕
tsi ^h ew-rir	saN- ^h er	sew-k ^{an}	tsi ^h -se ^h	ti ^h	xi ^h -seN	ka ^h -k ^{an}	xi ^h - ^h ew-k ^{an}	xi ^h -mba ^h
(掌) 323	(掌) 323		(掌) 325	(掌) 325	(掌) 325			

『番漢語要集』は、単語の認定と西夏語と漢語の対照資料という点で役に立つけれども、各単語形式にそれ以上の評価を
与える根拠とはならない。

11	10	9	8	7	6	5	4
𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗
𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗
梅	芍 葵	葵	山 丹	玉	燈 紅	丹 網 紅	石 竹
花	花	花	花	花	花	花	花
梅 漢 花 語	夏 芍 秋 葵 咲 花	秋 紅 葵 花 花	夏 山 日 丹 咲 花	夏 玉 咲 花	夏 紅 咲 燈 也 花	花 紅 春 菜 莉	咲 石 秋 竹 散 花 也 夏
〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕	〔漢〕
〔番〕	〔番〕	〔番〕	〔番〕	〔番〕	〔番〕	〔番〕	〔番〕
m ^w ɛ-x ^w a	tʃhɪr(?)-rɛ-fa	wɬɪn-n ^w i ₂ -fa	ʃyuf-kh ^w if-x ^w a	stun-kh ^w if-x ^w a	teŋ- ² dʒi-fa	xun-tan-x ^w a	lɪ-rɔ-fa
(掌) 134	(掌) 135	(掌) 134	(掌) 133	(掌) 136			(掌) 136

『(三才) 雑字』は、コズロフ・コレクションとスタイン・コレクションの中に、数種類の刊本と一つの写本が現存する。『掌中珠』に似て、この書物もかなり普及したらしく、数度版を重ねて、大型本と小型本があるだけではなく、大型本の中にもいくつかの版の違いが認められる。たとえば、ある版では分類項目を装飾で囲んでいるが、その装飾の仕方が相違するのである。

しかし、残念ながらどの版も完全な形で残っていない。

新しい版と推測できる小型本(コズロフ No. 80815)には、**統該図報紙紙** 未十八年九月、つまり乾祐十八年(丁未) 一一八七年の奥書がつき、経典の裏に書かれた写本(コズロフ No. 2535)には、**論説列報** **紙** **終** **紙** **首** **紙** **細** **細** 乾定申年正 六月七□四日(一二三四)の日付がついている。

現存テキストを総合すると、この書物は、

紙 **終** **紙** **終** **紙** **終** 雑字一品 上天一分

紙 **終** **紙** **終** **紙** **終** 雑字二品 下地二分

紙 **終** **紙** **終** **紙** **終** 雑字三品 中人三分

に大別され、おそらく『三才雑字』が正しい書名であったと考えられる。全体は蝴蝶装の三十葉程度のもので、さほど大部の内容をもっていないと判断できる。各品の分類項目をあげておく。

ただし、雑字一品上天一分のところは、かなり欠けているために、推測した部分を含んでいる。

雑字一品

天	月	星	雷電	閃	霹	雲	雪	雹	霜	露	風	天河
膝	蹴	霧	祀	類	發	鼓	蹴	核	靴	袴	毬	膝
蹴	霧	祀	類	發	鼓	蹴	核	靴	袴	毬	膝	蹴

慧 想 曰 悟 mban 秀 殊 有
老 悵 嬭 流 綾 牒 勑 勑

とつづき卷三は、

志 珍 巧 流 詩 ? 来 知

解 玆 泚 綴 泚 玆 泚 泚

の八品、卷四は、

強 貫 榮 育 漲 傾 ?

發 恠 發 發 發 發 發

の七品（實際は八品）に分けられる。いずれも抽象的な項目で、たとえば「慧」には、身体部分、身体の行為に関する単語が、「想」には親属名称が、「曰」には部姓、部族名などがそれぞれ収められる。

上述のように全体が七言一句の詩句の型で表現されるが、かなり難解で、筆者は未だ全部の解読を完成していない。分類基準が異なるが、さきにあげた『雑字』の宝の部分に該当する個処は、つぎのようにまとめられている。

鉉物、原宝、財宝、物

金塊、銀塊、純金、真

瑠璃、鏡明、碧細珠、

珠

珊瑚、琥珀、環輪、

環

帳 繡 繡 數 股 說 說

玆 胎 絲 絲 露 露 玆

泚 泚 窈 窈 玆 玆 玆

玆

綾 悵 數 綾 繡 玆

玆

鑰、簪、銅錢、鉄鉉、鉄

蘇 泚 泚 玆 玆 玆 玆

この『同義一類』は、たしかに各項目に極めて重要な単語が収録され、単語の意味自体の研究には、貴重な情報を提供し

てくれる。そして、おそらく記憶に便利なように七言に組み立てられていたのであろうけれども、やはり単語形式の羅列である点は、『三才雜字』や『掌中珠』と大して変りがない。そこから単語形式間のかくされた関連性を引き出すことはむづかしい。

ところが、その目的のために、極めて有用な信頼できる好資料が現存していた。それが本稿の主要部分をなす西夏人の詩である。

四

詩に見られる単語の使い方が、西夏語の語彙体系を研究する上で、欠かすことのできない基準を提供することに気付いたのは、かなり以前である。しかしこの詩自体がなかなか難解であって、一定の成果を得るまでに、少し時間がかかった⁽²⁰⁾。

まず、ここで詩と呼んでいる作品から説明しなければならぬ。西夏人の考えたジャンルに少くとも、**𐰽𐰺𐰍**と**𐰽𐰺𐰍**の二つがあった。前者は *ʾɟɪɟɪp* (上44) と読み、後者は *ka* (上57) と発音した。いまそれぞれを「詩」と「歌」で訳しておく⁽²¹⁾。

『文海雜類』に詩の字が登録され、その注に、

𐰽𐰺𐰍 **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍** **𐰽𐰺𐰍**

詩とは、道理、弁才、言喩、儒説、作詩を言う

とある。道理、弁才、言喩、儒説とは、たぶん詩の種類を言っているものと思われる。

『同義一類』の中に詩の項目があることは、さきにあげたが、そこには、詩の種類、言葉に関する単語、助詞、数詞、序数詞などが収められる。

これに対して、「歌」は、『文海』『文海雑類』の現存する部分に含まれておらず、したがって注がないが、あとで述べる『道理詩』に、**諠解** *ɣɔŋ-kə* (上49) - *kə* (上57) 「謡歌」という使い方があり、『同義一類』の詩の項目にも、「謡歌」が入っている。この *ɣɔŋ-kə* は、おそらく漢語の謡歌（はり歌）の借用であろう。この文字は、経典では、漢語の歌舞に **級解** があてられるように、「おどり」に対する歌を意味するのである。**解** 作歌という使い方もある。

さて、現存する西夏の詩は、つぎの五種類が代表する。いずれもレニングラードの東方学研究所に所蔵されるコズロフ・コレクションの中に含まれる。²²

1 **級解夜解** 『礼詩文一卷』 はじめの二字は、『三才雑字』の序の中にも使われるが、いま「礼詩」と訳しておく。断片三枚、蝴蝶装の第三葉を半葉のみ残し、欠けるところが多い。

2 **級解** 『大詩』 二部残っており、全体の分量は蝴蝶装で八枚、半番八行、一行十六字詰。No. 211 は完本に近いが、No. 2330 は、一葉目から六葉目まで、はじめとあとが欠ける。No. 211 は数文字欠けるが、No. 2330 から補うことができる。

3 **級解級解可解** 『月々楽詩一卷』 完本。蝴蝶装六枚、半番八行、一行十六字詰。数文字が欠ける。

4 **級解級解解** 『道理詩一卷』 完本。蝴蝶装八枚半、半番八行、一行十六字詰。ところどころ欠けた処がある。

5 **級解級解** 『智慧詩』 この詩の題の読み方には問題があるが、いまは「智慧」と訳しておく。蝴蝶装八枚残。半番八行、一行十六字詰。最後の部分を欠き、また八枚の中、数カ所欠けるところがある。

これらの詩の中に、一卷とある巻の字は、上述のようにチベット語 *theb* の借用語を表記した。その文字 **解** は、**尅** *pie* (上31) 「まへ」を意符とするから、本来卷子本を指したのであろう。

この五種類の詩はいずれも大型の刊本で、しかも雕版された年代が、はっきりと記録されている。

『礼詩文一卷』は、残存部分が僅かで、前後のつながりも把握しにくいが、つぎの奥書きは明確に読みとれる。

緇隨姪胤散終綴細胤類胤胤

乾祐乙巳十六年四月日刻字司頭監

辨駁張隨綴緇辨駁綴終胤散緇 後辨報

現前金唐管高、御史正、西夏学士 呂郎文茂等

胤類胤胤胤散綴胤胤胤胤胤胤胤胤胤胤胤

刻字司頭監⁽²³⁾ 三学院百法博士坐主 骨勒善源

辨辨綴綴 胤胤胤

筆持和尚 劉法雨

御史正、西夏学士、呂郎文茂、西夏三学院百法博士 骨勒善源、筆持和尚 劉法雨の名は、この一連の詩以外には、いまのところ出て来ない。

『大詩』の奥書きは、乾祐乙巳十六年四月一日日⁽²⁴⁾刻終綴となるほかは、『礼文詩』と同じであるが、No. 211 にはそのあとにさらに、一行、

緇胤胤綴綴綴綴胤胤散綴胤 終終綴胤

安□巳年閏臘月二十三日文(を)なす者 ? No. 212
が書き込まれている。

『月々楽詩』の奥書きは簡単に一行、乾祐乙巳十六年四月日、刻字司有(辨)があるのみである。
『道理詩』には、最後に、

新刊詩經

發

胤庭張司
紕駘奇

道理歌謡典

終

字二千一百十七

乾祐乙巳十六年五月日刻字司頭監……とあって、『礼詩文』および『大詩』と同じ内容がつづくが、三学院百法博士西夏坐主 骨勒善源で終わっている。

『智慧詩』は、末尾が欠けていて、奥書きは不詳である。

以上の奥書きからみて、この五種の詩は、乾祐乙巳十六年、一一八三年、西夏仁宗の時代に、それまで流布していたテキスト（おそらく卷子本）をまとめて雕版し、蝴蝶装にしたものと考えて差支えがない。この五種の詩は、全体で一セットと見做されていたのであろう。

五

これらの「詩」の裏面に、「歌」がある。この方はあとで書き込まれたもので、字形がかなりくずれており、大へん判読し難い。しかし、内容は極めて特異である。その中の若干は、ネフスキーが以前に、「宮廷詩」と訳して紹介している。⁽²⁴⁾よく知られる七言の歌、

1 黒頭の石の城は、漠水の^{ほとり}辺

2 赤面の父の塚は、白河の上^{かみ}

3 長河西の国は、そこにあり、

にはじまる歌もやはりこの詩の裏面に書かれていて、**麟刻麟跡**「夏聖根讃歌」という題がついている。

この「夏聖根讃歌」は、やはり難解なところがある上に、長文であるが、内容が重要で興味深いため、このつづきをつぎに訳しておきたい。この原文は、判読し難いところが多いが、クチャーノフ氏がすでにその西夏文を公表しているので、その原文と対照して日本語訳をあげることにする。⁽²⁵⁾

4 麟跡尾駝駝駝

儒士の背丈は、十尺の人

5 駝跡跡駝駝駝

馬身は善し、五つの鎧

6 麟跡跡駝駝駝

部(族)の節は近し、一腹の子

7 麟跡跡駝駝駝

ラル・トウの父の目量^{めかた}は大ならずも、ほぼ聖なり

8 駝跡跡駝駝駝

その昔、小をなすを肯んぜず、大心をもつ

9 麟跡跡駝駝駝

蔵女は、美しい妻女

10 麟跡跡駝駝駝

七子は、秀れた伴侶

11 麟跡跡駝駝駝

西の主は、^{あるじ}蔵の謀上^{チベットの}を散らす

12 麟跡跡駝駝駝

蔵の謀を散らすは、サン・ブ・ロン (san-mbuh-lon)

13 麟跡跡駝駝駝

東の主は、漢と軀を競いに往く

14 麟跡跡駝駝駝

漢と軀を競うは、チ・ク・リオン (tsi-kah-lion)

15 麟跡跡駝駝駝

グイン・ゲ (qin-ge) は、馬上、黄河を渡る。底は、陰ならず

16 麟跡跡駝駝駝

ホ・ハ (ho-ha) の父は、青根尾城で峯々を妨ぐ

17 麟跡跡駝駝駝

堅固な黒牛、坡頭の角は、

- 18 龍敵龍敵龍敵龍敵
 19 龍敵龍敵龍敵龍敵
 20 龍敵龍敵龍敵龍敵
 21 龍敵龍敵
 22 龍敵龍敵龍敵龍敵
 23 龍敵龍敵龍敵龍敵
 24 龍敵龍敵龍敵龍敵
 25 龍敵龍敵龍敵龍敵
 26 龍敵龍敵龍敵龍敵
 27 龍敵龍敵龍敵龍敵
 28 龍敵龍敵龍敵龍敵
 29 龍敵龍敵龍敵龍敵
 30 龍敵龍敵龍敵龍敵
 31 龍敵龍敵龍敵龍敵
 32 龍敵龍敵龍敵龍敵
 33 龍敵龍敵龍敵龍敵
 34 龍敵龍敵龍敵龍敵
 35 龍敵龍敵龍敵龍敵

香象と競い象牙を折る

ヌイウ・ヌイウ (nu-iu-nu-iu) のむく犬の長い口の歯は

虎と戦い、虎の爪を截つ

漢の天子は、

日々印を移し、印を損す

夜々の統御は、益を得ず

威徳は等しからず、疑は深まる

行為は便ならず、ラル・トゥは、自力で脱す

自我の阿婆（岳母）の母娘は、本源のところ

銀腹金乳は、秀れた種を断たず、名づけて鬼名

ヤ・ソン (yaf-son) の長老は、これを豈に知らんや

牛を求め、而して領上に出る

この亦後、天日子、龍と双ぶは何の因縁ぞ

後々子孫、漸次栄えるは、（西）夏のセ・ホ (yex-ho)

生れ出たる時、二齒をもつ

長じて後は、十種の吉祥悉く、主に集り

七騎を率きつれ、帝となりに来る

新撰新修歌

大学新修歌

- 1 齋穀茂嘉福而穀
- 2 蔣胤福而穀而穀
- 3 穀而穀 勿耶勿耶穀而穀
- 4 穀而穀而穀而穀
- 5 穀而穀而穀而穀
- 6 穀而穀而穀而穀
- 7 穀而穀而穀而穀
- 8 穀而穀而穀而穀
- 9 穀而穀而穀而穀
- 10 穀而穀而穀而穀
- 11 穀而穀而穀而穀
- 12 穀而穀而穀而穀
- 13 穀而穀而穀而穀
- 14 穀而穀而穀而穀
- 15 穀而穀而穀而穀
- 16 穀而穀而穀而穀

皇遣文星は、国の宝

仁徳は国中を福□に変える

西夏の君子は、聖句、聖言を文に染む

千の黒頭の処の徳師者

神謀神詞を聞き、詩に注す

万の赤面の儀をとるところ

土亦無き城を撃ち

土無城を撃ち、天久しく地久しく、美しく輝々たり

灰亦払い火を起す

灰を払い火を起し、日世月世を照して、亮々たり

爾る間、壬子の年、大宿を旧影上（より）移し

六王殿に新たに滞る

皇は喜び、神は喜び、不日にして染る大照房

人に和し、時と和をなし成る吉祥の宮

金角に孔を置けば、根西の黒風は、空々として暴る

樹の並ぶ処の門に趣けば、溝は富み、泉源は清く沈む

17 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍

冬は暖かき百樹の宮、宝を以て校飾^{かざり}し、獅子を縛りて、受く風を通さず

18 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍

夏は涼しい七節の塔、彩を以て飾り書き、神祇^{おせき}の飾座^{まじわ}は雲と混る

19 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 夜眠れば、眼辺を：せず悪きことは豈に夢みん、金台に足をふみ

往きて臥す

20 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 損毀を未だ識らず、保護をなす

21 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍

朝起れば、平等を恭い、善く純に念じ、聖なるさまの仏の近くに住む

22 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 命を支える如き福德の布施

23 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 思えば、天久しく、地久しく、徳なる国益を顯示し

24 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 日世、月世の宝位は、永く定ると言う

25 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍

自我も亦、帝が手に酒を与え、湯薬を飲ませれば、死は未だ得ず

26 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 神謀は華に坐し、青春に彩を増せば、老は未だ現われ得ず

27 龍龍龍龍龍龍 龍龍龍龍 龍龍龍龍龍龍 一に聖恩を以て、万人は樂しみを受ける也、世代亦た何ぞ有らん

西夏の「歌」は、ほぼ音節数を整え対句の型をとってはいるものの、語彙の特別な対立を示してはいない。したがって、西夏語語彙研究にも直接には役立たない。ところが「詩」の方は「歌」とは異って、非常に特異な構成を示しているのである。

六

本稿の主題である「月々楽詩」を例にとって、その構成法を述べてみよう。まず前置きの二句があつて、そのあと一月から十二月まで順を追って各月の情況が詩^{うた}われている。その詩い方が變つていて、はじめに「難かしい言葉」で一通り表現し、ついでほぼ同じ内容を「易しい言葉」で通して表現し改めるのである。ここで仮りに「難しい言葉」と「易しい言葉」と言つたが、実際にはそれがどのような性格のものなのか、換言すると、文語と口語といった種類の違いなのか、それとも社会的な階層の相違を反映しているのかを検討しなければならないが、それはあとで試みるとして、いずれにせよ「詩」に見られる二種類の表現は、西夏語内部の語彙の二つの階層をおそらく代表するものと考えて差支えがない。

そしてその二種類の表現は、各部分が対照されていて、すべて厳密に一致するわけではないが、音節数が揃うように調整されている。²⁷⁾

たとえば、「月々楽詩」の最初の部分は、六言に句切ることができ、つぎのような対照を示している。Ⅰは難しい表現、Ⅱは易しい表現であり、実際には、Ⅰ₁Ⅰ₂……Ⅱ₁Ⅱ₂……の順序で書かれている。

月 楽 根 源 問 う

	Ⅰ ₁	𐽀𐽁𐽂𐽃	kafi
	Ⅱ ₁	𐽀𐽁𐽂𐽃	ʔafi
		𐽀𐽁𐽂𐽃	khefi
		𐽀𐽁𐽂𐽃	niqN
		𐽀𐽁𐽂𐽃	ʔufi
		𐽀𐽁𐽂𐽃	ʔyir
hliʔ		𐽀𐽁𐽂𐽃	
hliʔ		𐽀𐽁𐽂𐽃	
mbeʔ		𐽀𐽁𐽂𐽃	
mur		𐽀𐽁𐽂𐽃	
rɪqN		𐽀𐽁𐽂𐽃	
rir ₂		𐽀𐽁𐽂𐽃	

月の楽しみの根源^{もと}はと問うならば

月々の楽しみの根はいずこに生る

月楽根源 演

kafi ʔɔfi kʰefi nɿqɑn ʔufi tʃhiw

I₂

𐵓𐵔𐵑𐵒 𐵓𐵔𐵑𐵒

月の楽しみの根源を述べるなら

II₂

𐵓𐵔𐵑𐵒 𐵓𐵔𐵑𐵒

月々の楽しみの根をもし述べるなら

hliʔ hliʔ mbeʔ mʉr tefi ndi

この二句について単語形式を取り上げると、西夏語語彙の同義語乃至類義語の対比する関係が、明瞭に浮び上がってくる。

I

II

kafi (平17) - ʔɔfi (平49) 月 : hli(?)

kʰefi (上33) 楽しみ : mbeʔ

nɿqɑn (平95) - ʔufi (平4) 根源 : mʉr (上76) 根本

tʃhiw (平47) 演べる : ndi (平65) 述べる

I「問う」とII「いずこに生る」は、直接には対比しないが、このような関連も随所にある。

𐵓𐵔𐵑𐵒

nɿqɑn-ʔufi の二字は、nɿqɑn と ʔufi 「頭」に分析できる一単語で、nɿqɑn は平声九十五韻に所属し、

𐵓𐵔𐵑𐵒

𐵓𐵔𐵑𐵒、𐵓𐵔𐵑𐵒…「本源也、根源也、本也…」の注をもつが、この詩の中で「易しい表現」𐵓𐵔 根本に対照されるところ

から、その意義を正確に認定することができる。

同じ構成をもつ『道理詩』においても、この根源は、於格の助詞をともなった「根」と対照される。

演べて、歌謡 根源 不演

道理 謠歌 根於 不述

『道理詩』の右の二句の単語を対照すると、先述の『月々楽詩』と同じ関係が判明する。

—

kəŋ (平71) - ɣʷŋ (上52)	?	:	yŋʷon (上49) - kə (上57)	歌謡
ŋʷan (平95) ɣuŋ (平4)	根	:	mər (上76) - ɣaŋ (上14)	根に於て
miŋ (平11) - ʃhiw (平47)	演べず	:	miŋ (平11) - ndi (平65)	述べず

この事実は、西夏語の研究にとって、極めて重要なそして大きい進展であると言わねばならない。

また、上述の道理詩の中で、**Kon-tzu** の意味に疑問符を与えたが、この単語はほかに使われた例がない。このはじめの文

[illegible]

この注から、この二字が歌謡の意味であることは推定できるけれども、①と③の関係は、この注からは同義語としかとれない。しかしこの「詩」の構成は、その二字が歌謡の意味であることを確認すると共に、西夏語における難しい表現であって、それに該当する易しい表現が、注の③であることを教えてくれる。この『文海』の注は、したがって、①歌謡（難）、②歌（易）、③歌謡（易）、④作歌修歌の意（易）のように、それぞれの単語形式に難しい表現か易しい表現かの情報を与えて、解釈することができるのである。

七

つぎに月の名称自体について、難しい表現と易しい表現を対照してみたい。これも、新年（の）月……正月……双重（の）月……二月……のように配列されている。

I		II	
一月	銀𪛗𪛗𪛗……新年（の）月	𪛗𪛗𪛗	正月
二月	𪛗𪛗𪛗……双重（の）月	𪛗𪛗𪛗	二月
三月	𪛗𪛗𪛗……第三（の）月	𪛗𪛗𪛗	三月
四月	𪛗𪛗𪛗……第四（の）月	𪛗𪛗𪛗	四月
五月	𪛗𪛗𪛗……第五（の）月	𪛗𪛗𪛗	五月
六月	𪛗𪛗𪛗……第六（の）月	𪛗𪛗𪛗	六月
七月	𪛗𪛗𪛗……第七（の）月	𪛗𪛗𪛗	七月
八月	𪛗𪛗𪛗……二四（の）月	𪛗𪛗𪛗	八月

九月	綱統	〃	……四五(の)月	紀綱	九月
十月	穽統	〃	……二五(の)月	穽綱	十月
十一月	穽統	〃	……五六(の)月	穽綱	十一月
十二月	穽統	〃	……□冷(の)月	穽綱	臘月

Ⅱの易しい表現では、正月以降は十二月を除き、基本数詞に月をつけているのに対して、Ⅰの難しい表現では、やはり十二月を除いて、三月以降七月までは特定の序数詞を使っている。そして八月以降は、偶数月の八月と十月は乗算、奇数月の九月と十一月は加算の形で月の呼称が表現されている。

この月の呼称の対照は、西夏語の序数詞の問題と大きい掛け合をもつために、少し脇道にそれる嫌があるが、ここで序数詞の問題に立ち入っておきたい。

西夏語の序数詞は、仏典などでは、すべて漢語の形にならって、第一は「**𐽀𐽂** *let-west*」、第二は「**𐽀𐽂** *hui-west*」のように、第二あたる *west* (本義は「分ける」) をつけて表現した。ところが西夏語固有の序数詞の形が別にあったのである。

ここで使われている難解な序数詞の形がそれで、それらは『同音』には登録されているけれども、ほかの文献にはあまり出て来ない。

その序数詞が第三から第七までに限られていたことは、この月の呼称から推測できるが、別の資料からも論証できる。

『同義一類』という単語集の存在はさきに述べたが、その中の「詩」の項目に、つぎの単語が列举されている。*印をつけたのが基本数詞である。

孤独	一	单条	一(合)一	複双	双双
𐽀𐽂、𐽀𐽂、𐽀𐽂、𐽀𐽂、𐽀𐽂、𐽀𐽂	*				

対(?) 二 双 複 三? 第三 三 第四

機 機 弱 機 茲 茲 茲 散 茲 茲

第五 四 五 第六 六 第七 七 八

殊 殊 細 低 龍 龍 終 種 種 苗 園

九 十 十 十 百 千の 万の 千

* 紕 紕 繭 繭 紕 紕 紕 紕 紕 紕

原文は七言ごとまとめて書いているが、ここでは、単語ごとに区切った。これから見ると、千および万の二音節形式があるいは序数詞であったかも知れない疑いを残すけれども、八、九、十には特別の序数詞は存在しなかったと考えてよいであろう。

この『同義一類』に登録された序数詞形が、『月々楽詩』の月の呼称の対照から確認されたことになる。ついでに述べておくと、西夏語には男子の長幼順を示す序数詞に固有の文字があった。その字形も『同義一類』に登録されており、『同音』と『(三才) 雑字』の中にも見付けることができる。

長男 次(男) 三(男) 四(男) 五(男) 双生児 六(男) 七(男) 八(男)

張 張 紕 紕 紕 紕 紕 紕 紕 紕

pu (上51) naf (上14) lɔ (上62) rɛN₂ (上37) ŋ^wɬr (平84) tsɪr (平92) šow (上46) wɪ (平8) ŋ^wɬr (平84) ɣar (平82)

『同音』における各文字に対する注や『(三才) 雑字』に登録されている単語形式のように、実際にはこの序数詞のあとに **紕** ɣiew (上40) (男) (ビルマ語 ɣok と同源) をつけて、**紕** ɪ-ɣiew 次男、**張** ɛN₂-ɣiew 三男、**紕** ŋ^wɬr-

ɣiew 四男のように表現した。そして、八男の ɣar は、固有の字形をもつけれども、単語形式としては、基本数詞の八 ɣar と同形であるから、序数詞は、この系列でも七で終わっていたと考えて誤りがないであろう。²⁸⁾

両系列の序数詞を対照すると、文字面ではそれぞれ固有の字形で書き分けられているけれども、言葉の形式の上では、第三を除いて月に使われる序数詞は、男子の序列の序数詞と全く一致する形を含み、第五の場合のみ初頭子音 (tsi: sɿ) と声調 (平声：上声) が異なることが判明する。

月の序数

男子の序列

基本数詞

第三	蕤 蕤	re (L66) - ŋɛiuh (ɸ3)	𠂔	riɛN ₂ (L37)	𠂔	sɿ (ɸ70)
第四	蕤 蕤	k ^w ɛ (ɸ33) - ŋ ^w ɛr (ɸ84)	𠂔	ŋ ^w ɛr (ɸ84)	𠂔	ɦɪr (ɸ92)
第五	蕤 蕤	tsɪr (L85) - lu (L1)	𠂔	tsɪr (ɸ92)	𠂔	ŋ ^w ɛh (ɸ27)
第六	蕤 蕤	ziɛw (ɸ46) - wɪ (ɸ8)	𠂔	wɪ (ɸ8)	𠂔	tsɰiew (ɸ46)
第七	蕤 蕤	ŋ ^w ɛr (ɸ84) - ka (ɸ63)	𠂔	ŋ ^w ɛr (ɸ84)	𠂔	sɿ (ɸ64)

三男の riɛN₂ は、本来 re- を含む二形式が縮約した形式であった可能性を想定できないわけではない。^(補注1)

西夏語の序数詞は、もともと一つの系列しかなかったと考える方が順当であろう。

八

『月々楽詩』の基本構成について、もう少し詳しく述べてみたい。

前置きの二句につづく正月の詩を分析してみると、全体をつぎの六つの句に区切ることができる。まず1句から6句まで

Iの表現があつて、ついでIIの1句から6句までが続くことは、さきに述べた通りである。

I

1	級眺赫迄	(新年(の)月) ……十五言	級眺	(正月) ……十四言
2	級眺	(白上) ……七言	級眺	(白上) ……七言
3	級眺	(風よけ) ……七言	級眺	(舎の内) ……七言
4	級眺	(月三) ……七言	級眺	(田輪) ……八言
5	級眺	(牛羊) ……十言	級眺	(驚羊) ……十言
6	級眺	(羊の子) ……七言	級眺	(羊は鳴き) ……七言

七言一句を主体にして、それより多い1句(I十五言対II十四言)で差異ができた場合、4句(I七言対II八言)で調整されて、Iの表現とIIの表現が、全体で同じ音節数になっている。そして各句の内容は、たとえば第一句のように、Iの表現とIIの表現がきれいに對比する。

I 黒頭も、赤面も、年の始めは、安楽にて、国は、祝宴する

I	級眺	①
I	級眺	②
I	級眺	③
I	級眺	④
I	級眺	⑤
I	級眺	⑥

II 黒頭も、赤面も、年の初めは、安楽にて、国は、筵をなす

すべてについて、このようにすっきりとした対比を示すわけではないが、この詩が、このような対照関係を構成原則としていることは確かである。

ところで『同音』には、本字の下に右か左かに一字注がついていて、右側の注字がある場合、注字から本字に、左側に注字があるとき、本字から注字へと読む原則になっていることは、ずっと以前に解いたが、²⁹『同音』の本字と注字の関係を、この詩の構成をもとに検索すると、そこに隠されたⅠの表現とⅡの表現の関係が、はっきりと表面化する。そして『同音』の注は、多くの場合、難しい単語を易しい単語で置き換えたものか、あるいはその反対の対照関係であったことがわかった。

① aとbは互用の注で、Ⅰ *hū* (上52)「頭」とⅡ *ʔuŋ* (平4)「頭」の階層の対比。
cは本字Ⅰ *nur* (平75)「黒い」と注字Ⅱ *hniəh* (平21)「黒い」の階層の対比。dはⅡ「黒い」と

Ⅱ「白い」の同じ階層内の意味対立。

② aとbは互用の注で、Ⅰ *h_uɛ* (平61)「面(かお)」とⅡ *njē* (上68)「顔」の階層の対比。
cは本字Ⅰ *sih* (上12)「赤い(柿)」と注字Ⅱ *neh* (平36)「赤い」の階層の対比、dはⅡ「赤い」とⅡ「黄い」の同じ階層の意味対立。

③ aはⅠ *tšɛ* (上54)「歳」とⅠ *sih* (上10)「始め」同じ階層の意味解説、bはⅡ *kɛw* (平45)「年」とⅠ「歳」の階層の対比。
cはaと互用の注、階層内の意味解説、dはⅡ *yn* (平4)「始め」とⅡ *is* (平10)「先、前」同じ階層内の意味解説。

④ aⅠ *ɿzi* (平30)「すべて具る(安)」に対する注字Ⅰ *nor* (上82)「具す」は、同じ階層の意味解説、bⅡ *ɿdziɛv* (平42)「安」に対する注字は、Ⅰ *rē* (上66)「楽」で階層の対比。
cⅠ *rē*「楽」に対する注字Ⅱ *nbeɿ*「楽」は階層の対比、dⅡ *siu* (上2)「楽」に対する注字Ⅱ *wə*「安」は、同じ階層の意味解説。なお *siu* と *wə* は互用の注。

⑤ 酒^a 醜^b 酒

⑤ a I loz (上47) に対する注字 I nguñ (上3) 「国土」は、同じ階層の意味解説。なお loz と nguñ は互用の注。 b I hien (9) 「国」に対する I loz 「国」は、階層の対比。

⑥ 花^a 蕊^b 蕊

⑥ a I phũñ (平3) と I theñ (平36) 二字で一単語「祝宴を開く」。b と互用の注をなし、同じ階層の意味解説である。

餽^c 餽

c I dxi (上60) 「筵」と注字 I dxi (上85) 「食」は、同じ階層の意味解説である。

『同音』の注には、いろいろの型があると考えて来たが、その意味上のつながりをここで検討している語彙階層の観点からみると、本字と注字の関係は、Ⅰの難しい表現とⅡの易しい表現の間の置換えか、それともそれぞれの語彙階層内部の意味解説、たとえば同義語、反義語をあげるなどの二点にしばられてくることが判明した。³⁰⁾

この事実、これからの『同音』の研究にとって、新しい重要な視点を提供することになる。

九

さて、いままで仮りに、Ⅰの系列の語彙を難しい表現と呼び、Ⅱの系列の語彙を、それに対して易しい表現と称して来た。もし、この二つの語彙層が、西夏の社会を構成した二階層、この詩においても基本的な弁別対比を詩っている黒頭と赤面の二階層の言葉を代表するものであったとすると、頗る面白い。

黒頭とは、西夏国内の遊牧民を指し、赤面とは農耕民を意味したと考えられる。したがって、Ⅰの表現は、黒頭つまり遊牧民の語彙によるものであり、Ⅱの表現は赤面つまり農耕民の言葉を使っていると推論できる十分な可能性があると思えるけれども、その断定に至るまでには、この仮説をなおよく検討する時間が必要であろう。

しかし、この仮説は、これまでの西夏語観を根底からゆさぶる斬新な見方ではある。

ここで、この語彙層に関連する重要な事実をもう二つ付け加えて、述べておきたい。

その一つは、二つの語彙層の弁別が、西夏文字の字形構成上に反映している事実であり、いま一つは、二つの語彙層の中、第二の易しい表現の語彙に、チベット語やロロ・ビルマ系言語との間で、同源語と認められる形式が圧倒的に多い事実である。

まずはじめに、西夏文字の字形とかかわる事柄について述べてみよう。

たとえば、「強」を意味する文字に **𐰇** と **𐰈** の二字がある。前者は、*khɨn* (平56) とよみ、後者は *ɲe* (平9) と発音して、音形式にはつながりがない。意味の上で両者は関連して、後者は前者から派生した会意文字と考えて来た。しかし、それ以上に重要なことは、詩の表現から確証できるように、前者がⅠの系列に属する語彙であり、後者はⅡの系統の語彙を表記している点である。したがって、字形 **𐰇** … 字形 **𐰈** の対立は、Ⅰの語彙とⅡの語彙の対立を反映しているのではないか。

この見方を支持する例は少なくない。

Ⅰ	𐰇	<i>khɨf</i> (上33)
	𐰈	<i>ɲɨf</i> (平14)
	𐰉	<i>tʃi</i> (平67)
	𐰊	<i>khɨf</i> (上33)
	𐰋	<i>paɨ</i> (上17)

Ⅱ	𐰌	<i>mbeʔ</i> (平38)
	𐰍	<i>ʃɨu</i> (平2)
	𐰎	<i>tʃi</i> (平67)
	𐰏	<i>ni</i> (上28)
	𐰐	<i>phaɨ</i> (平20)

楽 純粹 苦 至る 断つ

ただし、**𐰑** 語る(Ⅱ)と **𐰒** 歌(Ⅱ)のような違った意味を表明する単語が、字形上これと同種の対立を示す

場合があり得る。

このように字形の構成面に語彙層の違いが反映しているのは、西夏人自身が、この二つの層の存在とその弁別を深く意識していたことによるのであろう。

この新しい情報のもとに、西夏文字の構成原則を再検討する必要がある。

ついで第二の同源語の問題は、Iの系列の語彙の中にチベット・ビルマ語と同源語であると考えられる形が全く無いわけではないが、IIの語彙層の形式の方がチベット・ビルマ諸言語と圧倒的多数の同源語を含んでいるところにある。そして、Iの系列の語形には、他言語とのつながりが詳かでないことも多い。

具体的な例を示してみよう。²¹⁾

1 白い Iの𐰇 *lei w* (上38) よりも、II 𐰇 *phion* (平55) が、ロロ・ビルマ語形で、たとえばビルマ語の *phru* 白いなどと同源である。

2 頭 Iの𐰇 *h* (上52) よりも、II 𐰇 *u* (平4) が、ロロ・ビルマ語形で、たとえばビルマ語の *h* 頭などと同源形式である。

3 黒い Iの𐰇 *mur* (平75) より、II 𐰇 *hriah* (平21) の方が、普遍的なロロ・ビルマ語形で、ビルマ語 *nak* 黒いなどと同源である。²²⁾

4 赤い Iの𐰇 *sh* (上12) よりも、II 𐰇 *neh* (平36) が、ロロ・ビルマ語一般に分布する形で、たとえばビルマ語形 *ni* 赤いと同源である。

5 年 Iの𐰇 *st* (上54) よりも、II 𐰇 *kw* (平45) の形が、ロロ・ビルマ語形で、ニ・ロロ語 *ph* (22) アヒ・ロロ語 *khu* (44) などと同源である。

6 始め I の **𑖇𑖦** si (平10) (おそらく漢語の始) よりも、II **𑖇𑖦** yuŋ (平4) が、ロロ・ビルマ語形で、たとえばビルマ語の **𑖇𑖦** に近い。

7 人 I の **𑖇𑖦** dzɪ (平69) よりも、II **𑖇𑖦** nɪr (平86) の方が、チベット・ビルマ語形で、チベット語の **𑖇𑖦** 人と同源であろう。

8 水 I **𑖇𑖦** njan (平95) の来源は詳かでないが、II **𑖇𑖦** ɛzɪr (上85) は、ロロ・ビルマ語形で、ビルマ語 **𑖇𑖦** rɪy > rei はじめ、ニ・ロロ語 **𑖇𑖦** 33、アヒ・ロロ語 **𑖇𑖦** 22 など同源形式が多い。

9 木 I **𑖇𑖦** re (上66) の同源関係は不詳であるが、II **𑖇𑖦** siŋ (平11) は、チベット・ビルマ語一般の形で、ビルマ語 **𑖇𑖦** sac 樹やチベット語 **𑖇𑖦** shing に近い。

10 目 I **𑖇𑖦** kar (平83) の来源は不詳であるが、II **𑖇𑖦** mɛ (平33) は、チベット・ビルマ語全般に分布する形で、ビルマ語 **𑖇𑖦** myak- やチベット語形 **𑖇𑖦** mig 目と明らかに同源である。

11 薄い I の **𑖇𑖦** zɪr (平86) -si (上9) の来源は不詳であるが、II **𑖇𑖦** mɔŋ (平11) の方は、ロロ・ビルマ語形で、たとえばビルマ語 **𑖇𑖦** pa²- と同源である。

12 種々 I **𑖇𑖦** i²ɪu (上52) -hlaw (平43) の来源は不詳であるが、II **𑖇𑖦** mɔh-mɔh (上25) は、ビルマ語形 **𑖇𑖦** myu²-myu² > myu²-myu² と同源形式である。

13 蛙 I の **𑖇𑖦** kɔŋ (平27) -ɾɔr (上73) の二音節形式の来源は不詳であるが、II **𑖇𑖦** pɛ (平66) は、チベット・ビルマ語形で、たとえばビルマ語の **𑖇𑖦** pha² やチベット語の **𑖇𑖦** sbal と同源である。

14 ある、もつ I の **𑖇𑖦** hɛw (上41) に対応する形は不詳であるが、II **𑖇𑖦** ndrɪŋ (平3) は、明らかにチベット語 **𑖇𑖦** hdug 「有る、もつ」と同源である。

15 草 I の 𦵑 *kih* (平14) よりも、II 𦵑 *tsah* (平17) が、チベット語 *rtswa* 「草」と同源形式である。

16 青い I の 𦵑 *tshuān* (平3) よりも、II 𦵑 *u⁴ar* (平84) が、チベット語形 *sngon-po* 「青い」と同源であろう。

先に述べたように、I の系列の語彙の中に、チベット・ビルマ語と同源関係にある単語がないというのではない。

17 I の 𦵑 *u²* (上28) 「ねむる」は、明らかにビルマ語 *u²* を代表とするロロ・ビルマ語の形に属する。それに対して、

II の 𦵑 *u¹* (上7) は、チベット語 *gnyid* に対応するのもかも知れない。

18 I の 𦵑 *mān* (上26) - *wiēn* (平12) 「出生」のはじめの形「生れる」は、ビルマ語 *mwei² / mui²* などロロ・ビルマ語形と同源であると考えられる。

19 I の 𦵑 *tsā* (平68) 「色」は、チベット語 *tshos* 「色彩」やビルマ語 *cho²* 「染める」と同源である。

しかし、I の語彙の中のチベット・ビルマ語と同源形式は、数の上から言えば、II の語形に比べてはるかに少ないのである。

そしてまた、I の表現とII の表現、双方に出てくる単語もある。たとえば 𦵑 二や 𦵑 五の基本数詞、否定の形式 𦵑 *mih* (平11) がそうである。

𦵑 *tsā* (平29) 「風」は、主にI の 𦵑 *u¹* (上7) に対立して、II の表現で使われるが、I の表現でも、𦵑 𦵑 「風よけ」のように複合形式の中に現われている。

西夏語語彙の比較研究は、まだ初步的な段階にあるが、チベット・ビルマ語的形式は、II の易しい表現に多く認められることは、強い傾向として、指摘できるのである。

II の易しい表現は、同時により口語的な表現であったと考えられる。あとで述べるように、たとえば上述の「筵をなす」に見られる… 𦵑 形動詞の使用や、𦵑 𦵑 「開いた」𦵑 𦵑 「ねむった」のような動詞に接頭詞がつく形式も、II の表現に

I² 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^①𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^②

白上の風よけでは、羊が子を生む

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^①𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^②

白上の暖舎では、羊が開く（子を生む）

I³ 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^③𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^④

風よけで、日が黄くなれば、羊の子は睡る

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^③𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^④

小舎の中で、太陽が黄くなれば、小羊は眠りにつく

① I lā (平29) - tīr (上72?) : II ʔyār (上75) - lōw (上47) Iは風と制（おさえる）の結合で、風よけの囲いと解せる。IIは、

暖かい小屋の意味。② I mīch (上44) : II ʔyeh (上33) 共に羊で、『雑字』の羊の項目の第一語に、この二語を結び付けた

統統が登録される。『掌中珠』では、IIの ʔyeh に漢語 羊があてられ、mīchの形はない。ʔyehが、羊一般を意味する口

語の形であろう。③ I mī (上7) tsiw (上40) : II mīy (平32) nar (上76) 太陽が黄くなる。平声四十五韻 𪛗 tshīw「黄

色」の注に、𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 「黄黄也、金色の如く也」とある。西夏人は日中の太陽を白色、日暮れの太陽を

黄色に見ていた。④ I mīch-nch : II h₂ (上68) 羊の子、IIの h₂は『同音』で 𪛗 ʔyeh 羊を注字（右）とするが、この

対照から、小羊の意味であることがわかる。

I⁴ 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^④𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^③

月の三日（をすぎ）、君子に意志があれば

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^①𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^②𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗^③

円輪が廻り、丈夫に意志があれば

① I、月の三日（を過ぎ）：II 円輪が廻り、この対照は逐語的ではないが、「日時が過ぎ」の意に解する。② I 𪛗 (平69) -

h₂ (平58) 君子：II 𪛗 ō (平94) - zīh 丈夫、ほかに、𪛗𪛗𪛗 𪛗 ō-kie (上31) がある。③ I si (平8) hīw (上41) : II phih (平11)

-nduh (平3) 有意、is (平8) に対する『文海』の注に、𪛗𪛗𪛗 「意也」とあるのは、この関係を証明する。

I

1 𪛗𪛗 (双重の) …… 十言

2 𪛗𪛗 (縁家) …… 七言

3 𪛗𪛗 (冷たい) …… 七言

4 𪛗𪛗 (諸々) …… 七言

5 𪛗𪛗 (西丘) …… 十一言

6 𪛗𪛗 (鶴) …… 七言

7 𪛗𪛗 (鶴) …… 七言

II

𪛗𪛗 (二月) …… 十一言

𪛗𪛗 (流者) …… 七言

𪛗𪛗 (冬の氷) …… 六言

𪛗𪛗 (種々) …… 七言

𪛗𪛗 (西丘) …… 十言

𪛗𪛗 (鶴は鳴く) …… 七言

𪛗𪛗 (鶴は飛ぶ) …… 七言

I の表現の第1句における不足音節は、第5句で補われているが、第3句では、II の表現が一音節少ない。

I₁ 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗

双重の月は、路辺は青く、長寿は逝く

II 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗

二月中は、道端に花が咲き、黒い雁は飛びかう

① I rē (上66) -phū (上2) 路辺: II sīa (平16) -tī^won (上49c) 道端 ② I tshūn (平3) 青: II wīn (上27) -mbīe (上8)

花が咲いた wīn- は動詞接頭辞、 ③ I kziōn (上64) -ⁿdzīān (上44) 長寿: II ⁿdzī (平8) -hniān (平21) 黒い雁、いずれも、

N ↑ Adj の形、 ④ I mbiēn (上35) 逝く: II ⁿdzi^won (平56) 飛ぶ。 II の最後の文字 theŋ (上33) の機能はまだよくつかめない。

い。

I₂ 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗

縁家は歩を進めるが、衣を着けず

II 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗

流者は往き去るが、着物や履物は薄い

① I? ngu (上1) 縁家: II rar (上73) -mie (上68) 流れて行く者。② I mbih (上10) -tsheh (平35) 歩を挙げて行く、歩行するの意: II rir-veh 往く、rir- は方向接頭辞。③ I hlu (平1) mih (平11) ku (上51) hlu は衣服、ku は衣を着るの意。mih は否定、II ng^wih (上10) kzi (平67) mbih (平11) ng^wih は衣服、kzi は履物、ku は靴、hlu には『文海雜類』に筋筋、筋筋、筋筋「着物や衣服也」の注がある。衣服に関する文字は少ない。『掌中珠』には、筋筋衣服、筋筋襖子(綿入れ)、筋筋襯衣(下着)、筋筋靴などが収録される。

I 批批徽徽批批脛脛 冷たく白い水は、資財のるつぽ

II 批批脛脛批批脛脛 冬の白い水を、春がとかす

① I ndi (上28) -k^wur (平88) 冷たい: II tsur (平75) 冬 ② I nian (平95) -le^w (上38) 白い水: II [?]w^c (平70) -phion (平55) 白い水 ③ I s^wih (平11) 資源: II n^wi (上28) 春、s^wih は、説 mah (平27) と共に使われ、資財、資源、根源になるもの意である。④ I k^w (上45) -rur (平76) るつぽ: II nah^w-dz^wi (平10) とかす。k^w-rur は、『(番漢語) 要集』の中で、漢語増埒と注されている。

I 孩商批批批批脛脛脛脛 諸々(の物)は、冬に入り、見えるものは白い

II 孩孩批批批批脛脛脛脛 種々の貯え去るものを、前に出す

① I I^w (上52) -hel^w (平43): II mah (上25) -mah 諸々、種々の意 ② I tsur (平75) hi 冬に入る: II lu (平1) -sif (平63) 貯え去る、I と II は逐語的な対照ではないが、意味の上で相関している。③ I kar (平80) -sif (平11) 現われる(もの) phion 白く、II n^wi (上2) 前方に wif-ct^w (上42) 出る。I と II は逐語的対照を示していない。

I 茲批批批批批批批批批批 西丘の月は、鶴に語る、水は美しいかと問う

Ⅱ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 西の丘の明月は、鶴に言った、江は美しいかと

① I sã (平64) -^udzü (上52) : Ⅱ le (?) -lon (上47) 西(の)丘、『同音』le (?) の注(右) sã 『文海雜類』^udzü の注に
𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 「丘也……高地の意」とある。② I kah (平17) -^uch (平49) 月 : Ⅱ hli (?) sew (平43) 明月、

③ I hiu (上2) : Ⅱ mar (上76) -wir (平77) 鶴、『文海雜類』hiu (上) の注に、**𪗇𪗇𪗇𪗇** 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇
𪗇𪗇𪗇𪗇 「鶴也、飛禽の中の鶴、頭が黒く冬季に牧する者の意」とある。したがって、鶴は、黒頭すなわち遊牧民の意味
として使われる。『文海』平声七十七韻 **紀** にもよく似た注が与えられている。④ I tshiw (平47) 語 : Ⅱ nah-nq (上56)

言う ⑤ I niqn (平95) 水 : Ⅱ tshia (平19) 江、I tsẽ (上54) 美しい、^uyir (平86) 問う : Ⅱ kion (上64) 疑問詞、kziar (平87)
美しい。『同音』tsẽ (上) と kziar (平) は互用の注。kion (上) 疑問詞の注(左) ^uyir (平) 問う。

I 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 鶴は、水が美しく、月は西(方にと)

Ⅱ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 鶴は鳴き、江は美しく、月が出る西(方に)

I 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 鶴の面が大きくとも、水は尽きず

Ⅱ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 鶴は飛び、顔が大きくとも、水は尽きたことがない

① I hl^wẽ (平61) 面、pah (平27) 大きい : Ⅱ nie (上68) 顔、le (上54) 大きい ② I niqn (平95) mih-mion (上64) : Ⅱ kziar (上85)
meh (上33) mion (上64) 水は尽きない。mih (平) と meh (上) は否定詞。mion (上) 尽きるは、I の表現Ⅱの表現共通して
使われる。

三月の詩は、つぎのように六句から構成されている。

Ⅰ 籐 越 通 蹴 激 激 勢 勢 蹴 蹴 蹴 蹴

強勢の国土には、水が歩み、草は青く、丘では牛を射る

Ⅱ 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹 翹

優勢の国熱には、水は流れ、青が出て、曠野を穿つ

① Ⅰ mbiuh (上3) ʔɔh (平49) 強勢：Ⅱ ʔiɛ₂ (平6) ʔiɛ (平74) 優勢 ② Ⅰ lon (上47) ŋiuh (上3) 国土：Ⅱ hle (平2) lon (上47)

国は熱い ③ Ⅰ njan (平95) mbih (上10) 水は歩み：Ⅱ ʔziɾ (上85) ʔar (上73) 水は流れる。④ Ⅰ kh (平14) tshʷiuh (平3) 草が

青い：Ⅱ ŋʷar (上76) tɕh (上42) 青が出る。⑤ Ⅰ ʔdziu (上52) mbiu (平2) kha (平18) 丘(で)牛を射る：Ⅱ ny (平58) ndah

(上17) m (上58) 曠野を穿つ。「牛を射る」はよく使われる表現。『新集錦合道理』でも「射る」と「穿つ」は対比される。

Ⅰ 籐 越 通 蹴 激 激 勢 勢 蹴 蹴 蹴 蹴

東方の金剛木、天日は語り、叢竹を捜す

Ⅱ 籐 越 通 蹴 激 激 勢 勢 蹴 蹴 蹴 蹴

東山の上の杜鵑は言う、樹を植えたか

① Ⅰ mah (平20) thɛ (平30) 東方(の) ʔyi (平69) piɕh (平51) 金剛木：Ⅱ ŋvɛ (上61) ʔar (平80) 東山の tshiah (平21) 上、② Ⅰ

miɛh (上11) ʔir (上72) 天日：Ⅱ ʔiɛw (上40) 杜鵑 miɛh-ʔir は一単語で、両字は『同音』で互用の注の關係にたつ。また miɛh

と ʔiɛw は対称文字で、共に杜鵑を意味するのであろう。ʔiɛ (上72) の注に、**花 籐 籐 籐 籐 籐** 「夏季に牧する者、青い

杜鵑」(『文海』)とある。③ Ⅰ ʔe (上66) ʔiɛ (平70) tʰow (平53) 叢竹を捜す：Ⅱ sih (平11) ʔiɛn (上64) ʔdzu (上5) 樹は何を植

るか。これは、杜鵑の鳴声を指すのかも知れない。ʔdzu (上5) には、『文海雜類』に、**籐 籐** 「裁也」とある。

Ⅰ 籐 越 通 蹴 激 激 勢 勢 蹴 蹴 蹴 蹴

天(日)は語り、叢(木)の色は、太陽の輝きの足

Ⅱ 籐 越 通 蹴 激 激 勢 勢 蹴 蹴 蹴 蹴

杜鵑は鳴き、樹花は日の光の下

① Ⅰ ʔiɛn₂ (平42) ʔiɛn (上37) 太陽の輝き：Ⅱ mbi (上7) ʔir (上72) 日の光 ② Ⅰ ʔiɛr (上78) 足：Ⅱ khiuh (平3) 下。

I 𪛗⁵ 𪛗² 𪛗³ 黄色の食物、夏菜は豊かで、世は優れる

II 𪛗¹ 𪛗² 𪛗³ 𪛗⁴ 豆を食べ、花を覽て、飢えない国

① I tsɿ^wew (上40) k^wa (上21) 黄色の食糧: II tu (上1) ^udzɿ (平10) 豆を嚙む。② I tsh- (ㄉ) naw (上19) 春の菜: II fa (平24)

(ㄉ) 花を覽る。③ I wir (平77) rɿur (平76) rɿe (平75) 豊かな、世は優れる: II miŋ (平11) ^udzɿ^wew (上40) hle (ㄉ) 飢えない

国。逐語的な対照ではないが、意味の上で相当する。

I 𪛗⁶ 𪛗¹ 𪛗² 𪛗³ 𪛗⁴ 天日の面は大きくとも、叢を朽させず

II 𪛗¹ 𪛗² 𪛗³ 𪛗⁴ 𪛗⁵ 杜鵑の頭と顔は、樹を毀さず

① I wiŋh (平7) 朽ちさせる: II ke (平61) 毀す。『同音』では、この二字は互用の注の関係にたつ。この句は、二月の詩の最後の一句と揃っている。

四月の詩は、つぎのように構成されている。

1	𪛗 ¹ 𪛗 ² (第四)	……十一言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (四月)	……十一言
2	𪛗 ¹ 𪛗 ² (諸財)	……七言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (諸宝)	……七言
3	𪛗 ¹ 𪛗 ² (天日)	……七言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (鵲青)	……七言
4	𪛗 ¹ 𪛗 ² (丘皮)	……十言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (坡広)	……十言
5	𪛗 ¹ 𪛗 ² (草中)	……七言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (□□)	……九言
6	𪛗 ¹ 𪛗 ² (沢辺)	……十言	𪛗 ¹ 𪛗 ² (沼際)	……十一言

- 7 蕪織 (鹿皮) ……七言 𪛗𪛗 (鹿皮) ……七言
 8 澈茲 (坎与) ……七言 𪛗𪛗 (露不) ……七言
 9 𪛗𪛗 (蛙) ……六言 𪛗𪛗 (蛙遊) ……六言

Ⅱの表現は、第五句と六句で三言(三音節)多い。

- I₁ 蕪蕪𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 第四の月は夏草が青に至り、叢は稠り美しい

- Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 四月一日に、夏季が出て、樹草は稠る

① Ⅱ low (平43) neh (平36) 一日。Ⅰには逐語的に対応する表現はない。② Ⅰ ? 𪛗𪛗 (平84) ki (平30) kheh (上33) 夏草が青くなる。kheh (上)は至る。対応するⅡの表現は𪛗𪛗であるが、ここでは使われていない。𪛗(平)は動詞方向指示接頭辞、

𪛗は反切が不明であるが、『文海雜類』に、𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 「夏の時節に青を出す(もの)の意」と説明される。Ⅱ

tsh-(ㄘ)-lu (上1) 𪛗(ㄘ)-tsh (上42) 夏季が出る(はじめる)。四、五、六月が西夏の夏季である。③ Ⅰ re (上66) kih (平14)

thow (平53) 叢木が、稠って、美しい。: Ⅱ sih (平11) si (ㄘ) kih (平14) 樹草が稠る、kih (平)草は、Ⅰの表現にもⅡの表現

にも使われる。

- I₂ 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 諸財(をもって)恩功(を施し)、国は饗宴を開く

- Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 種宝(をもって)恩功(を施し)、国は筵をなす

① Ⅰ ly (上52) kiu (平59) 諸財: Ⅱ mah (上25) kzi (平69) 種宝、② Ⅰ ? n^wly (平59) 恩功: Ⅱ li (上60) he (上68) 恩功。『文

海雜類』に見られる𪛗 (反切不詳)の解釈に、𪛗𪛗𪛗、𪛗𪛗𪛗、𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 「a恩功也、b恩功也

……強弱を安排する(?)の義也」とあるが、その中、aはⅠの表現、bはⅡの表現であることがわかる。

I 3 酸後茲終纒雅慨^① 天日は語り、夏草は青く明らか

II 綢雅務繡葩雅纒^① 青い杜鵑は鳴き、夏は顕らか

① I m^we (平33) 明らか: II ndah (上17)-seh₂ 顕らか、ndah- は動詞接頭辞である。綴吡 xu (平1) m^we (平33) 分明と雅纒 nū (平2) seh₂ (平36) 顕現の対立であって、『同音』では、(i) xu の注に m^we' (ii) m^we の注に seh₂ が使われる。(i) は I を I で注したもの、(ii) は I を II で注したものである。(iii) seh₂ の注は nū で (iv) nū の注字が seh₂ であるから、これは II の語彙の互用の注である。

I 4 砒織慨終繡葩雅纒^{①②③④⑤⑥} 丘の地肌は変りなく、男の志の土には、視るものは美しい

II 砒後茲繡葩雅纒^{①②③④⑤⑥} 広い坡に皮は無く、男の志の土地には、視たいものは美しい

① I ⁿdzū (上52) 丘: II loz (上47) leh (平36) 広い坡、② I lin (平32) mih-ndih (上10) 地肌は変らず: II ⁿdzi (上28) meh (平36) 皮は無し(地肌がそのまま出ているところが無いの意か)、ndih は破れる、変るの意(?)。③ I ti (平66) tshia₂ (平19): II ŋ^wo (平94) -kiur (上70) 男の志。④ I li (上61) 地、土地: II tsir (平77) 土。⑤ I khiuā (上6) hie (平61) 視る、観る: II zeh (平36) yu (上2) 視たい、zeh- は願望の接頭辞、⑥ I thow (平53) 妙: II sičh (上44) 美しく。

I 5 綢後茲綴繡葩雅纒^{①②③④⑤} 草の中は、彩りをゆるめ、色有(花)は開く

II 綢綴綴繡葩雅纒^{①②③④⑤} □□の花は咲き、紫綴を拡げたよう

① II šia (上16) kiew (平45) 花の名、具体名は不詳。② I luā (上6) ktu (平58) 彩りをゆるめる、彩りを厚くしの意。③ I tsu (平68) tshiu (平2) 色有(=花) phie (上8) 開く: II fa (平64) 花 mbie (上8) 開く、I phie (上8) 開く、解くと II mbie (上8) 開く、この両者は、同一語幹からの派生形式であろう。④ II tshien₂ (上37) nch (上42) 紫綴。⑤ II wiā (上27)

rel^(上) 拡張する。④⑤に相当するIの表現はない。
 rel^(上) 拡張する。④⑤に相当するIの表現はない。
 rel^(上) 拡張する。④⑤に相当するIの表現はない。
 rel^(上) 拡張する。④⑤に相当するIの表現はない。

I 6

靴^①、襪^②、屐^③、履^④、襪^⑤、襪^⑥、襪^⑦、襪^⑧

沢の辺^{ほとり}の諸草^{くさぐさ}は、尺の高さを現わし、水と武器を斗わす

Ⅱ

① 姦姦 ② 珣珣 ③ 鞞鞞 ④ 緇緇 ⑤ 嶮嶮 終

沼の端ほとりの種々の草は、背が高く、水波なみと斗いつづける

① I you (上) 42 niyū (上) 2 沢の辺 : II rei (平) 87 ŋciŋ (上) 49 沼の際、
② I kɯŋ (平) 14 諸の草 : II si (平) 6 mah

(上²⁷) 草種、種々の草、③ I tshiah (上¹⁸)ⁿ dzah (上¹⁴) seh₂ (平³⁶) 尺 (漢語より) を測る (高さ) を現わす: II th₁ (上²⁸)

mbiŋ (平3) - mbeŋ (上33) この高さは (高い) の意、ⅠとⅡは逐語的な対照になっていない。④ Ⅰ n̄iān (平95) 水: Ⅱ Bziin

(上85) mibuh (平3) 水の波、⑤ I bu (平63) ri (上72) 武器を斗わす.. II wa (平33) 斗う、**道** 斗うの注に、**薙** **綴** **徧** **効**と

ある。

I 7
 ① 齋
 ② 燄
 ③ 龍
 ④ 隄
 ⑤ 隄
 ⑥ 終
 ⑦ 隄
 ⑧ 隄
 ⑨ 隄
 ⑩ 隄
 ⑪ 隄
 ⑫ 隄
 ⑬ 隄
 ⑭ 隄
 ⑮ 隄
 ⑯ 隄
 ⑰ 隄
 ⑱ 隄
 ⑲ 隄
 ⑳ 隄
 ㉑ 隄
 ㉒ 隄
 ㉓ 隄
 ㉔ 隄
 ㉕ 隄
 ㉖ 隄
 ㉗ 隄
 ㉘ 隄
 ㉙ 隄
 ㉚ 隄
 ㉛ 隄
 ㉜ 隄
 ㉝ 隄
 ㉞ 隄
 ㉟ 隄
 ㊱ 隄
 ㊲ 隄
 ㊳ 隄
 ㊴ 隄
 ㊵ 隄
 ㊶ 隄
 ㊷ 隄
 ㊸ 隄
 ㊹ 隄
 ㊺ 隄
 ㊻ 隄
 ㊼ 隄
 ㊽ 隄
 ㊾ 隄
 ㊿ 隄
 鹿の皮の縄（をもって）、馬をつなぐ

Ⅱ
 犯^①姦^②姦^③龍^④化^⑤孫^⑥遊^⑦
 鹿の皮の索^な縄^わ（をもって）、馬をつなぐ

① I sũh (平⁷) lin (平³²) : II rǎh (平¹⁷) ɰ̥d̥zi (上²⁸) 鹿の皮。
 ② I k^wɰh (上²⁵) lu (上¹) 繩 : II sǐch (平⁵¹) mbih (上¹⁰) 細

い索。③ I me (上³⁴) dzu (上¹) : II riē (平⁷⁴) 馬。馬の種類の相違であろうか、共に『雑字』に登録されている。④ I

žú (土1) : Ⅱ nań (平20) -tšć (平61) しなぐ。

Ⅰ 8
 漚漚瀟瀟
 坎みづと和し、
 湿土は、
 くずれ落ちる

Ⅱ
 ① 彫慨薺猗漢猗
 ②
 ③
 露は災いなく、
 泉源は斜めに偏く

① *i* *njān* (平⁹⁵) *rit* (上⁷²) *wit* (平⁷⁷) 水と和す。『文海』平声七十七韻、*wit* の解説に「和合也、和睦也……」とある。Ⅱ

Rzer (上76) min (平11) thw (上45) 露は災わすことがない。ⅠとⅢの連関はあまり明瞭ではない。② I seh (平36) -t^wch (平

49) 湿り：Ⅱ ror (上73) -meh (上25) 泉源、平声三十六韻および四十九韻の解説に、**微哉散**、**微哉散**「坎水也、湿水の意」とある。③ I kon (平54) -kah (平17) くずれ落ちる：Ⅱ kor (上82) -ke (上66) 偏斜、斜め偏く、それぞれ『同音』では一単語として扱われるが、両者のつながりははっきりとしない。

I 9 ^① ^② ^③ **後終彌慨衛純** 蛙が戯れるは、不梵の土

Ⅱ **後終彌引逐結** 蛙が遊ぶ袋は、聖住の地

① I kar (平27) -rar (上73) : Ⅱ pie (平66) 蛙。② I kh^we (平37) 戯れる：Ⅱ ʔu (上1) 遊ぶ、Ⅱの表現には ʔen (上37) 袋がつく。③ I mih (平11) x^wan (平25) 不梵、Ⅱ sien (上37) ʔdien (平39) 聖(なるものが)住む。

五月の詩はつぎのように構成されている。

I

1 **殊務** (第五) ……十四言 **倭蹴** (五月) ……十四言

2 **蔬亥** (縁者) ……七言 **綴序** (流者) ……七言

3 **砒亥** (丘頂) ……十言 **笏尾** (高地) ……十二言

4 **弱徭** (草草) ……七言 **訖絲** (蒲蘆) ……七言

5 **惟弱** (羊草) ……七言 **慌纒** (羊葱) ……七言

6 **衛衛** (大蛇) ……七言 **飛駭** (大蛇) ……七言

7 **頤亥** (陽陰) ……十一言 **廷纒** (女男) ……十二言

Ⅱの表現は、第三句で二音節、第七句で一音節、計三音節が多い。

Ⅱ

I₁ 殊務赫耽須微耽茲商紛微茲慨通 ① ② ③ ④ 第五の月は、国に坎が降り、種々の草は彩りをかくさず

II 僂蹴屏膺繼姦微赫赫較難微難微 ① ② ③ ④ 五月中、国に雨が来り、諸々の菜草は花を放つ

① I nian (平95) ʔa (上15) 坎が降る：II ʔdzju (上52) nah (平20) ʔe (平61) 雨が来る（降る）。② I l'ju (上52) hlew (平43) 種々：II mah (上25) nyē (上68) 種々 I の形式は被限定詞に先行し、II の形式は被限定詞に後置する。③ I kih (平14) rir (上72) 草々：II si (平30) si (平30) 菜草。④ I huh (上6) miñ (平11) zu (上1) 彩りをかくさず：II fa (平64) ndah (上17) wē (上54) 花を放つ、逐語的な対照を示していないが、よく対応する。

I₂ 蕤茲微赫微微微 ① ② ③ ④ 縁者は歩を進め、觀賞して楽しむ

II 綴亦耽難微微微 ① ② ③ ④ 流者は往き、覽て愛する

① はじめの四言は、二月の詩の第二句と一致するが、I の表現の縁家が、ここでは縁人 ʔdzju (平2) となっている。② I re (上66) 楽しむ：II ki (平30) kor (上82) 愛する。

I₃ 微微微微微微微微微微 ① ② ③ ④ 丘の頂の□草は、鳥の裂けたうしろの（ごとく）□して動かず

II 笱尾死微微微微微微微微微微 ① ② ③ ④ 高地の紅草は、おん鶏の尻尾の如く、曲って定まる

① I ʔdzju (上52) hu (上52) 丘の頭：II li (上61) mbeh (上33) 高い土地。② I kih (平14) rir (上72) □草：II neh (平38) si (平30) 紅草。③ I ʔdzju (平56) ʔdza (上15) ku (平58) 鳥の裂けたうしろ ʔdza (上) の正確な意味は不詳。II ʔyar (上75) wia (平61) mieh (平39) おん鶏の尻尾、逐語的な対照を示していないが、意味の対応関係はよくつかめる。④ I ndah-〔字欠〕-miñ (平11) fur (上73) ……して動かず：II kh'i (平30) nah-ndien (上37) 曲って定まる。

I₄ 紛微微微微微微微微微 ① ② ③ ④ 草草を、黒頭の毛頭に冠す

Ⅱ 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 蒲蘆を、黒頭の氈帽に戴く

① I kīh (平14) rir (上72) 草草 : Ⅱ phu (平1) ʔdzə (平68) 蒲蘆 ʔdzə の原義は稠 (あつまる)。② I mi (上58) lū (上52) 毛

頭 (に) ʔpū (上52) 冠する : Ⅱ sʰi (上28) mbw (上45) 毛氈の帽子 (に) ʔtɕie (上31) 戴く、mbw は帽の音写。

Ⅰ 5 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 羊草、未草は頭を離れず

Ⅱ 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 羊葱、羊葱は頭を相互に受ける

① I tɕiū (上52) kīh (平14) 羊草 : Ⅱ tɕhi (平30) kīū (平59) 黒羊の葱。② I mīh (上44) kīh (平14) 羊草 : Ⅱ ʔyeh (上33) kīū

(平59) 羊葱。③ I lū (上52) mīh (平11) phe (上34) 頭を免れず : Ⅱ ʔuh (平4) Bzon (上47) Bzon 頭を互に執る。動詞の重複

は相互態を示す。

Ⅰ 6 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 大蛇は歩行し、叢の中に光る

Ⅱ 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 大蛇は流れんとし、畜舎に居るを望む

① I tīh₂ (平29) -hīʷiū (平59) : Ⅱ phioŋ (上43) -lɛ (上54) 大蛇。② I mbih (上10) tɕheh (平35) 歩行する : Ⅱ ʔeh (平36) rar

(上73) 流れんと願う。③ I re (上66) ʔu (上1) rūr (平76) 叢の中に光る : Ⅱ ʔdzəh (上42) ʔeh (平36) nduh (平4) 家畜小屋に

居ることを望む。ʔeh- は願望を示す接頭辞、ʔdzəh (上) には『文海雜類』に、𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 「家

畜が水を飲むところ、草を食べるところ ʔdzəh の意也」とある。『同音』では、𦵑 馬の注 (右) がつく。nduh には

𦵑𦵑、𦵑𦵑、𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 「有る也、設ける也、安置し有るの意也」と解説されている (『文海』)。なおⅠの大

蛇には、『文海』で、𦵑𦵑𦵑𦵑、𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 「大蛇也、無足の意」とある。

Ⅰ 7 𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑𦵑 陰陽の赤い臂は、日中、牛の乳をしぼり、匠は儀式をもつ

終っている。

I 1 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 第六の月、沢は青く、相続き、草は色を持つ

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 六月中、沼は青く蒼玄にて、菜は□をもつ

① I nch (上42) tshūh (平3) 沢は青い：II r̄ar (平87) ŋ^wur (平84) 沼は青い。② I th^wi (上58) -th^wi (上58) 相続き：II pah (平20) peh (平36) 蒼玄 逐語的にIとIIは対応しないが、上の語句と連係している。③ I kin (平14) 草 tsɕ (平68) 色 hɿ^w (上41) 持：II na^w (上19) 野菜 □ ⁿdžeh (上32) もつ。

I 2 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 昆虫は飛び、昆虫は語り、国は安楽

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 蝴蝶は飛び、鶯鶯は鳴き合い、国は楽しい

① I ton (平54) -keh (平36) 昆虫：II pah (平20) -pūh (上3) 蝴蝶、いずれも『同音』で互用の注をとる二音節単語である。② I phih (平14) 飛ぶ：II ⁿdžī^won (平56) 飛ぶ。phih (平) には『文海』で「ⁿdžī^won 也」と注されるから、両者の関係は確かである。③ II k̄ar (平88) 鶯鶯、『掌中珠』に 𪛗𪛗 鶯鶯鶴がある。つづく ton (平) 昆は衍字であろうか。

I 3 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 鉄匠は、南領東方に逝き

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 紅い熱材は、東方より来る

① I s̄i^won (平56) k̄ir (平92) 鉄匠：II s^wih (平11) 資材 tsah (平20) 熱い neh (平36) 紅い。② I k̄zir (平88) ŋ^w-u₂ 南領 mah (平20) -thi (平30) 東方：II ɣah (平20) m̄eh (平39) 末尾、東の意である。③ I m̄biēh (上35) 逝く：II r̄ir-ɿe (平61) 来る。

I 4 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 青草に放牧する、碎土の細爪

Ⅱ 花 羽 散 花 花 散 花

夏狂に解く 砂漠の□□

① I ʔ u^u r^u (平84) 青い夏草：Ⅱ tsh- (ʔ) ʔa (上56) 夏狂い。② I n^u t^u i (ʔ) 放牧する：Ⅱ k^u h^u (平4) ゆるめる、解く。③

I tsir (平77) n^u dⁱ i² (平69) 土砕：Ⅱ mⁱ (平65) n^u e^h (平36) 紅土。④ I d^u zⁱ i² (平67) n^u d^u z^u (上1)：Ⅱ kⁱ (平30) kⁱ y^u n (上49) いずれ

も動物(家畜?) 名と考えられるが、具体名は不詳。

I 5 散 花 散 花 散 花 散 花 散 花

野獣が逝き、引導者は不大、戯れず待つ、戯心は慧し

Ⅱ 散 花 散 花 散 花 散 花 散 花 散 花

驛が馳け、引導者は細かく、転がらず我は遊ぶと謂う

① I m^u vⁱ (上7) - ŋ^u g^u r^u i (上10) 野獣：Ⅱ ŋ^u r^u e^u r (上78) 驛 I の形式には、**散 花** 野獣の注がある。② I m^u bⁱ e^h (上35) 逝く：Ⅱ

d^u zⁱ i² n^u (平32) wⁱ (平10) 馳せる。③ I v^u (ʔ) s^u s^u (平28) 導く者：Ⅱ ŋ^u h^u (平4) n^u (上9) 引導者、『文海雜類』に **散 花** 散、

散 花 散 「引導也、和尚也」の注がある。④ I mⁱ n^u (平11) j^u (上54) 不大：Ⅱ j^u n^u (上14) 細い。⑤ I mⁱ (平30) j^u n^u (平1) 戯

れず hⁱ e^h (上35) 待つ：Ⅱ mⁱ (平30) ʔ^u e^u w^u (上40) 転がらず。⑥ I k^h e^u (平37) n^u e^h (平39) 戯れる心：Ⅱ ʔ^u n^u (上1) h^u g^u n^u (平

17) 我は遊ぶ。

I 6 散 花 散 花 散 花 散 花

赤絲の昆虫、鶯は翼をひろげ

Ⅱ 散 花 散 花 散 花 散 花

紅錦の蝴蝶、鶯は飛び

① I p^u (上51) sⁱ h^u (上12) 赤い緯：Ⅱ k^u o^u (平94の上) n^u e^h (平36) 紅の錦。② I t^u n^u (平54) -k^u e^h (平36) 昆虫：Ⅱ p^u a^h (平28) -

p^u h^u (上3) 蝴蝶。③ I m^u a^h (平27) ŋ^u u^u (上1) 鶯鵬：Ⅱ ʔ^u r^u (平86) 鶯。④ I p^u h^u (平14) 飛ぶ、翼をひろげる：Ⅱ d^u zⁱ i² o^u n

(平56) wⁱ (平10) 飛ぶ。『文海』の p^u h^u の注に、**散 花**、**散 花** 散 「飛ぶ也、翼を拡げる也」とある。

Ⅱ首^①蹴^②聃^③駮^④ 七月中、種々の穀物の果は大きく、善獸は肥え、国は宴をなす

① I-ir (上71) 稻：Ⅱsīh (上6) khie' (平38) 穀物の果。② I-? 大きい：Ⅱni (上60) 垂れ下る (?) ③ I-tsar₂ (平80) k'iu (平56) けものの財：Ⅱniuh (上3) nje (平74) 善獸Ⅱ家畜の意。④ I-? ふとる：Ⅱtshu₂ 肥える。『文海』平声七十二韻 蹴^①の注に、

蹴^①駮^②駮^③ 脂肪也、肥満にするものの意」とある。

Ⅰ^①蹴^②駮^③ 異の頭は低くなく、草の頭は黄色い

① I-m (上7) hu (上52) 巽 (風) の頭：Ⅱsīh (?) 'dzia (平19) 草の先端。② I-mih (平11) mbih (上10) 低くない：Ⅱ'za (?)

mbie (上8) 萎える、枯れる。③ I-kih (平14) 草の hu (上52) 頭は tsī'ew (上40) 黄色い：Ⅱhīh (平29) 風の ruh (平4) 頭は nge (平61) 不善。『文海』平声六十一韻に、^①駮^②駮^③駮^④「壞也、不善好の意也」の注がある。

Ⅰ^①蹴^②駮^③駮^④ 日中は坎が降り、翼衣は語る。楽しい寿命は長い

Ⅱ^①蹴^②駮^③駮^④ 卓午に露が下り、鶴鶉が鳴き合う。楽しい各々の命

① I-nīan (平95) 'za (上15) 水 (雨) が降る：Ⅱ'zar (上76) hī (?) 露が下る。② I-tuh (上25) ng'ih (上10) 翼衣：Ⅱton (平54) 鶴鶉。③ I-'dzi (平8) 寿命 kir (上72) 長い：Ⅱ? 各々 k'zōn (上64) 寿命。『同音』y 'dzi と k'zōn は互用の注。

Ⅰ^①蹴^②駮^③駮^④ 西夏の駿馬の□木は、白く

Ⅱ^①蹴^②駮^③駮^④ 西夏の子の皮の鞍は、白く

① I-hle (平61) ? 西夏：Ⅱmih (上10) 西夏 zih (平11) 子供。② I-mbe (上34) 'dzu (上1) 駿馬：Ⅱrar (上74?) tlen₂ (平42) 馬

④ I ʔ wə (上54) 捕える： II hu (上3) 鳥(を) wi (平8) 捕える。 wə (上) には、**惟** **森** **慨** **茲** **祇** 「纏縄して解かしめな
い」と注される。 **漚** は、 **漚** u ʔ p o (平56) 鳥の誤りであろう。

I ʔ ^① **森** ^② **慨** ^③ **漚** **漚** **漚** **漚** **漚** 鹿を追い、稲を刈り、三途を得ても落ちず

^① **死** ^② **臥** ^③ **駟** **駟** **駟** **駟** **駟** 鹿を馳らせ、高粱を刈り取り、三停しても滞らず

① I siuh (平7) 鹿(を) u ʔ p wə (平45) 追う： II I ʔ (反切不詳『掌中珠』の漢字表記は嚇) 鹿(を) na (上17) 馳る。

② I ri (上71) 稻(を) u ʔ p i (平67) 刈る： II k w ə (平49) 高粱(を) k w i (平) 刈り取る、採る。『文海』に、**駟** **森** **駟**、

漚 **漚** **漚** **漚** **漚** 「刈り取る也、穀物を刈り切る缺也」とある。③ I re (上66) ngu (平3) 三途 II 三惡趣 u ʔ r (上78)

得る： II s ə (平70) re (上66) 三停、三度とまる。④ I mi (上10) hi (平29) 落ちず： II mi (上10) ri (上72) 滞らず、

re (上66) ri (上72) は、停滞。

九月の詩は、つぎのように構成されている。

I

II

- | | | | | |
|---|------------------------|------|------------------------|------|
| 1 | 細 儼 (四五) | ……八言 | 紕 緇 (九月) | ……七言 |
| 2 | 砥 紕 (丘頭) | ……七言 | 笏 帛 (地高) | ……七言 |
| 3 | 姦 商 (種々) | ……七言 | 薜 緇 (蔬草) | ……七言 |
| 4 | 緇 儼 (四五) | ……七言 | 紕 緇 (九食) | ……七言 |
| 5 | 訖 紕 (稻踐) | ……七言 | 發 紕 (压頭) | ……七言 |

6 𪗇𪗇 (稲白) ……七言 𪗇𪗇 (麦白) ……七言

7 𪗇𪗇 (貫有) ……七言 𪗇𪗇 (袋々) ……七言

I の表現は、II の表現よりも第一句で、一言多い。

I₁ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^② 四五月は、稲の頭を刈らんとする

II 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^② 九月中は、田の頭を切りとる

① I rir (上71) lru (上52) 稲の頭：II rar (平82) ruh (平4) 田の頭。② I ndi (上28) khew (平44) 刈る：II ndah (平71)

ng^wi (平30) 切る、折る。ndi (上) は願望の接頭辞、ndah (平) は方向指示の接頭辞である。『文海』平声四十四韻 khew の解説に、𪗇𪗇𪗇𪗇、𪗇𪗇𪗇𪗇……「破折也、壊倒也……」とあり、平声三十韻 ng^wi の解説に、𪗇𪗇𪗇𪗇、𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇「折也、絶也」とある。

I₂ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^②^③ 丘の頭の草々は、歩行する匠人たくみ(のごとし)

II 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^②^③ 高い地の霜は、送迎する儀式のごとし

① I kih (平14) rir (上72) 草類：II ? 霜。② I mbih (上10) tshen (平35) 歩行する：II khuh (平6) sih (平29) 迎送。③ I kh^hi (平92) 匠人：II ten (上55) 儀式、典 siuh (上3) 似る、…の如し。

I₃ 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^② 諸種の草々は、実をもたず

II 𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇^①^② 種々の草蔬あおもものは、果を結ぶ

① I kih (平14) rir (上72) 草類：II si (平30) sih (平?) 蔬草＝野菜。② I ts^weh (平35) miu (平11) tshiu (平2) 実をもたず：II

I 6 𪛗𪛗𪛗^① 𪛗𪛗𪛗^② 𪛗𪛗𪛗 白稻、黄稻に、未だ霜露は降らず

II 𪛗𪛗𪛗^① 𪛗𪛗𪛗^② 𪛗𪛗𪛗 白麦、黄麦に、果実は結ぶ

① I 𪛗 (上71) tsɿ^waw (上40) 黄色い稻 : II 𪛗 (平67) 𪛗 (上76) 黄色の麦。② I meh (上33) ? 𪛗 (上76) : II ndah (上17) kɿe^y (平38) ma (平23) I の ? 𪛗 (上) は、霜露、II の kɿe^y (平)-ma (平) は果実で、いずれも名詞であるが、ここでは、否定詞 meh (上) あるいは方向指示接頭辞 ndah (上) をつけて動詞として使っている。

I 7 𪛗𪛗𪛗^① 𪛗𪛗𪛗^② 𪛗𪛗𪛗^③ 𪛗𪛗𪛗 錢貫を串くは、慧い長者

II 𪛗𪛗𪛗^① 𪛗𪛗𪛗^② 𪛗𪛗𪛗^③ 𪛗𪛗𪛗 諸の袋に盛るは、腹心有り

① I sɿh (平17) ?ɿh (平49) 錢貫有り : II 𪛗 (上45) 𪛗 (上45) 諸々の袋。② I nah (平23) kɿion (平50) 串く : II 𪛗 (上27) kɿur (平76) 盛る。③ I kɿur (平) 慧い、phaɿ (平27)-mbɛ (平61) 長者 : II ?ɿh (平49) 𪛗 (平39) ndiɿh (平3) 逐語訳する、腹心有となるが、I の長者に相応する別の表現であろうか。

十月の詩は、つぎのように構成されている。

I II

1	𪛗𪛗𪛗 (二五) ……十四言	𪛗𪛗𪛗 (十月) ……十三言
2	𪛗𪛗𪛗 (千万) ……七言	𪛗𪛗𪛗 (庶民) ……七言
3	𪛗𪛗𪛗 (黔巽) ……七言	𪛗𪛗𪛗 (黒風) ……七言
4	𪛗𪛗𪛗 (草類) ……七言	𪛗𪛗𪛗 (草類) ……七言

5 緹訖 (黒鳥) …… 七言 緹訖 (黒雁) …… 八言

6 緹訖 (西方) …… 七言 緹訖 (西方) …… 七言

7 緹訖 (黔叢) …… 七言 緹訖 (城白) …… 七言

8 緹訖 (強勢) …… 七言 緹訖 (優勢) …… 七言

I の表現は、第一句で II よりも一言多いが、第五句では反対に II の表現の方が一言多く、I と II とは全体で調整されている。

I₁ 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖
二五の月は、種々の貯蔵に慧は息み、国は宴を開く

II 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖
十月の中は、種々の貯置に心は休み、国は宴をなす

① I tu (平1) nu (平5) 貯蔵する: II wu (上51) tu (平67) 蔵に置く、wu (上) は蔵に入れるの意。② I bzir (平) 慧: II nieh (平39) 心。③ I win (上27) -tu (平63) 息む: II win (上27) -ndien (上37) 休む。tu と ndien は『同音』で互用の注の関係にある。ndien (上) -tu (平) 休息(する)。

I₂ 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖
千万の樂安は、国に矢が飛ぶ

II 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 緹訖
庶民の快樂は、邦に射る鳥

① I tu (平58) wan (平23) 千万: II seh (上33) yu (上2) 庶民。② I kheh (上33) nch (上42) 樂安: II mbe' (平38) re (上66)

快樂 ③ I ngiuh (上3) si (平69) 'dzi' on (平56) 国土に矢が飛ぶ: II hieh (平) kha (平18) we (上30) 国に射る鳥、si (平69) は

漢語矢の借用語であろう。西夏語 𐰇𐰆 (平67) に対応する。『文海』平声六十九韻の注に、緹訖 緹訖 緹訖 緹訖 「箭矢也、箭之意」とある。cf. WRB. lei² < hy² WRT. gzhu

I 3
 𪛗⁽¹⁾
 𪛗⁽²⁾
 𪛗⁽³⁾
 𪛗⁽⁴⁾
 𪛗⁽⁵⁾
 𪛗⁽⁶⁾
 𪛗⁽⁷⁾
 𪛗⁽⁸⁾
 𪛗⁽⁹⁾
 𪛗⁽¹⁰⁾
 𪛗⁽¹¹⁾
 𪛗⁽¹²⁾
 𪛗⁽¹³⁾
 𪛗⁽¹⁴⁾
 𪛗⁽¹⁵⁾
 𪛗⁽¹⁶⁾
 𪛗⁽¹⁷⁾
 𪛗⁽¹⁸⁾
 𪛗⁽¹⁹⁾
 𪛗⁽²⁰⁾
 𪛗⁽²¹⁾
 𪛗⁽²²⁾
 𪛗⁽²³⁾
 𪛗⁽²⁴⁾
 𪛗⁽²⁵⁾
 𪛗⁽²⁶⁾
 𪛗⁽²⁷⁾
 𪛗⁽²⁸⁾
 𪛗⁽²⁹⁾
 𪛗⁽³⁰⁾
 𪛗⁽³¹⁾
 𪛗⁽³²⁾
 𪛗⁽³³⁾
 𪛗⁽³⁴⁾
 𪛗⁽³⁵⁾
 𪛗⁽³⁶⁾
 𪛗⁽³⁷⁾
 𪛗⁽³⁸⁾
 𪛗⁽³⁹⁾
 𪛗⁽⁴⁰⁾
 𪛗⁽⁴¹⁾
 𪛗⁽⁴²⁾
 𪛗⁽⁴³⁾
 𪛗⁽⁴⁴⁾
 𪛗⁽⁴⁵⁾
 𪛗⁽⁴⁶⁾
 𪛗⁽⁴⁷⁾
 𪛗⁽⁴⁸⁾
 𪛗⁽⁴⁹⁾
 𪛗⁽⁵⁰⁾
 𪛗⁽⁵¹⁾
 𪛗⁽⁵²⁾
 𪛗⁽⁵³⁾
 𪛗⁽⁵⁴⁾
 𪛗⁽⁵⁵⁾
 𪛗⁽⁵⁶⁾
 𪛗⁽⁵⁷⁾
 𪛗⁽⁵⁸⁾
 𪛗⁽⁵⁹⁾
 𪛗⁽⁶⁰⁾
 𪛗⁽⁶¹⁾
 𪛗⁽⁶²⁾
 𪛗⁽⁶³⁾
 𪛗⁽⁶⁴⁾
 𪛗⁽⁶⁵⁾
 𪛗⁽⁶⁶⁾
 𪛗⁽⁶⁷⁾
 𪛗⁽⁶⁸⁾
 𪛗⁽⁶⁹⁾
 𪛗⁽⁷⁰⁾
 𪛗⁽⁷¹⁾
 𪛗⁽⁷²⁾
 𪛗⁽⁷³⁾
 𪛗⁽⁷⁴⁾
 𪛗⁽⁷⁵⁾
 𪛗⁽⁷⁶⁾
 𪛗⁽⁷⁷⁾
 𪛗⁽⁷⁸⁾
 𪛗⁽⁷⁹⁾
 𪛗⁽⁸⁰⁾
 𪛗⁽⁸¹⁾
 𪛗⁽⁸²⁾
 𪛗⁽⁸³⁾
 𪛗⁽⁸⁴⁾
 𪛗⁽⁸⁵⁾
 𪛗⁽⁸⁶⁾
 𪛗⁽⁸⁷⁾
 𪛗⁽⁸⁸⁾
 𪛗⁽⁸⁹⁾
 𪛗⁽⁹⁰⁾
 𪛗⁽⁹¹⁾
 𪛗⁽⁹²⁾
 𪛗⁽⁹³⁾
 𪛗⁽⁹⁴⁾
 𪛗⁽⁹⁵⁾
 𪛗⁽⁹⁶⁾
 𪛗⁽⁹⁷⁾
 𪛗⁽⁹⁸⁾
 𪛗⁽⁹⁹⁾
 𪛗⁽¹⁰⁰⁾

Ⅱ
 ① 龍死に就く
 ② 龍死に就く
 ③ 龍死に就く

黒風が立ち興り、鹿の吼声（のごとし）

I 4
 ① 筋 ② 絛 ③ 逆
 絛 絛 逆 絛 絛 絛
 草むらを異かぜが圧え、うしろで馬は驚く

Ⅱ
 ① 綈 ② 解 ③ 駭
 駭 駭 駭 駭 駭
 草むらを風が打ち、
 黄羊は林で駭く
 おどろ

① I kũh (平14) rir (上72) 草むら : II sah (平17) yuuh (上4) 草むら。② I mi (上7) krier (平78) 異が圧す : II lih (平29) tui (平30) 風が打つ。krier (平78) には、『文海』平声七十八韻に、**𪛗𪛗**、**𪛗𪛗**、**𪛗𪛗**、**𪛗𪛗**「圧する也、うなさる也」、また遊び騒ぐの意。③ I kũ (平58) ŋeh (平36) tshc (上62) うしろで馬が驚く : II l'ũ (平59) mch (平49) ph'cr (上84?) 黄羊が林で驚く。l'ũ (平59) は、**𪛗𪛗**「黄羊」のこと、ph'cr (上84?) は、『同音』で tshc (上62)「驚く」の注(左)字として使われる。𪛗は「驚き起き上る」の意。

Ⅰ 5
 續訖終蕪纒蕪
 黒鳥は語りながら、敦い蕪の頭（を飛ぶ）

Ⅱ
 ① 飛ぶ
 ② 鳴き合う
 ③ 頭のごとく
 黒い雁は鳴き合い、□□の頭のごとく（飛ぶ？）

① Iⁿ dži^w on (平56) mur (平75) 黒い鳥：Ⅱⁿ dži (平8) hñiāh (平21) 黒い雁。『文海雜類』の中に、ⁿ dži の注があり、**飛禽雁効**「飛禽雁の意」とある。② I tshīw (平47) 語る：Ⅱ[?] yar (上75) 鳴く。後者は重複形式をとり、「互に鳴く」を意味する。③ I re (上66) thon (平54) lū (上52) 敦い叢の頭：Ⅱ thaw (上38) -kiē (上59) ʔuñ (平4) siuñ (上3) タウ・キエの頭のこつこ。thaw-kiē の真意は不詳、動物または植物の名であろう。共に「飛ぶ」を補ってみた。

I 6 ① 茲薺^① 薺^② 薺^③ 薺^④ 薺^⑤ 西方より湧き出て、東方に逝く

Ⅱ 脇^① 薺^② 薺^③ 薺^④ 薺^⑤ 西方より出て、東に往き去る

① I ša (平64) nīe (上68) 西方：Ⅱ le (?) līe (上68) 西方、『同音』le (?) 西の注(右)に ša (平64) 西が、使われる。『同音』nīe (上68) の注字(右)は ša で、『文海』平声六十四韻 ša の解説に、**茲薺**、**脇**、**薺**、**薺**、**薺**「西方也、西也、西方浄土也」とある。その最後の二字 khek-tj (平36—平70) には、「根西」の注があるから、西方浄土を意味したのであろうか。② I tsu (上1) ŋg^w iñ (上10) 湧き出る：Ⅱ ʔa-tch (上42) 出た、ʔa- は方向指示接頭辞。③ I mah (平20) thi (平30) 東方：Ⅱ wi (上15) 東。④ I mbieh (上35) 逝く：Ⅱ nah (平20) -weh (平35) (下に向けて) 往く。

I 7 ① 薺^① 薺^② 薺^③ 薺^④ 薺^⑤ 黔^{くろこ} 叢^{むらがり}(と) 皓^{しろ}壁^{かき}の官(殿)は、新らしからず

Ⅱ 薺^① 薺^② 薺^③ 薺^④ 薺^⑤ 白^{しろ}城(と) 黒^{くろ}い堡^{とりで}は、安定したり

① I re (上62) mur (平75) 黒い(樹木の) むらがり：Ⅱ wi (上7) phion (平55) 白^{しろ}い城。② Iⁿ dzin (平32) lew (上38) 白^{しろ}い壁：Ⅱ šīe² (上31) hñiāh (平21) 黒^{くろ}い垣^{かき} šīe² は高い堡のことであろうか。③ I mñ (平14) mñ (平11) siēw (平46) 宮殿は新し^{あらた}くな^くな^く：Ⅱ nah (平20) -nuh (平4) ndien (上37) 安定してしまった。

I 8 ① 薺^① 薺^② 薺^③ 薺^④ 薺^⑤ 強^{しる}勢^{せう}の国^{こく}土^どに、楽^{しる}し^るみの記^{しる}しが現^{あら}われ

もある星宿の一つ。mch (平44) は林の意。mbih (上10) は「歩く」、mu (平1) は「没む」。⑤ I nián (平95) ndi (上28) šow

(平53) 坎を集めんと望む：II mah (平20) ʔw (平70) ʔah (上14) 河を氷が蔽う。

I 2 批𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 皓い寒さに(も)、占頭つうたいの道は曲らず

II 批𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 白い氷に(も)、道途みちを真直に判断させる

① I kiur (平88) law (上38) 皓い寒さ：II ʔw (平70) phion (平55) 白い氷。② I phich (平51) ʔuh (平4) re (上68) 占頭の道。

II šia (平61) tshih (平11) 道途 ③ I mih (平11) ke (上69) 曲らず：II ty (平58) thi (平30) wi (平10) 真直にする。ke (上69)

は慨𪛗 不直の意。ty (平58) は真直ぐ、thi (平30) は判断する。

I 3 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 西夏ツレの子は眼が歪めども、步行往還に、愛を結ばず

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 西夏ツレの子は目が斜けども、来り往くに、愛を碍けず

① I hle (平61) nch (上42) 西夏の子：II mih (平11) zih (平11) 西夏(シ族)の子供。② I kar (平83) ʔen (平41) 眼が歪む。

II me (平33) non (平54) 目が斜めになる。③ I mbih (平11) tshen (平35) neh (平6) loh (平48) 步行往還：II fir (上77) -lah (平

20) wih (平27) weh (平35) (こちらに) 来て (向うに) 行く。④ I nch (上42) mih (平11) tsh'on (平55) 愛(助け)を結ば

ず：II ʔdzu (平1) meh (上33) lu (上51) 愛をまだ碍げず。

I 4 批𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 寒い馬の舌に、黒鹿は満ちる

II 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 凍る馬の齒に、夜鹿を受ける

① I kiur (平88) mbe (上34) 寒い馬：II kur (上69) rye (平74) 凍る馬。② I ʔ ku (上51) 口の中＝舌：II tshi (平10) 齒。「口

の中」を「舌」の意味に解釈するのは、つぎの根拠がある。(i)『道理詩』の中で、𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗と𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗(口中不善と

舌惡)が対比される。(ii) *ku* (上51)に**収脣**「口中の顔」の注がある。(iii)『文海雜類』の舌の注に、**紹…前脣**後「舌…口中也」とある。③ *I siuh* (平7) *mur* (平75) *lv'o* (平94) 黒鹿は満たす… *II rahn* (平2) *si'cn* (平56) *la* (上15) 夜鹿を受ける。黒鹿と夜鹿が対称されるが真意は不詳。

十二月の詩はつぎのように構成される。

I

II

- | | | | | | | |
|---|-----------|------|-------|-----------|------|-------|
| 1 | 批批 | (○冷) | ……十一言 | 收脣 | (臍月) | ……十一言 |
| 2 | 𧈧𧈧 | (地牛) | ……七言 | 𧈧𧈧 | (春牛) | ……七言 |
| 3 | 𧈧𧈧 | (新年) | ……十一言 | 𧈧𧈧 | (先卜) | ……十一言 |
| 4 | 𧈧𧈧 | (若輩) | ……七言 | 𧈧𧈧 | (若老) | ……七言 |
| 5 | 𧈧𧈧 | (歳?) | ……七言 | 𧈧𧈧 | (年頭) | ……七言 |
| 6 | 𧈧𧈧 | (屋舎) | ……十言 | 𧈧𧈧 | (宅下) | ……十一言 |

第六句でIIの表現が一字多いほか、IとIIの表現は、十一言もしくは七言で一致する。

I 1 **批批** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** 寒き月の第五(日?)は、歩みが凝り集らず

II **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** **𧈧𧈧** 臍月中の五九(日?)は、寒流に魚が散る

① *I ndi* (上28) *k'ur* (平88) *kaŋ* (平17) *ʔŋ* (平49) 寒さを望む月… *II re* (平73) *hi* (?) 臍月。② *I ts'ir* (上85) *lu* (上1) 第五(序数詞)… *II ŋ'w'ar* (平27) *ŋg'in* (平32) 五・九。③ *I rir* (上77) *mbih* (平11) *tɔ* (平70) *mih* (平11) *ʂow* (平53) 歩みは凝り集らず… *II n'eh* (上32) *rər* (上73) *k'zin* (上2) *ndaŋ* (平20) *sər* (上73) 冷たい流れに、魚は散って行く。 *mih ʂow* 集らず *II sər* 散

る。「凝る」と「冷たい」は字形上類似する。

I 2 ① ② ③ 凝凝夥夥絆絆夥夥 地の牛を撃ち、精気は変り逝く

II ① ② ③ 犂犂犂犂犂犂犂 春牛を打ち、驅鬼は孤を驚かす

① I tshi (平67) mǐch (上6) 地の牛：II n^wi (上28) mbju (平2) 春牛 『雜字』では、犂犂 nur (平75) mǐch (上6) と犂

犂 re (上66) mbju (平2) が対比される。② I rir₂ (平86) -rǐe (上68) 撃つ：II ki (平30) t^wi (平30) 打つ。西夏語で、「打つ」

「撃つ」を意味する語形は多い。たとえば、犂 t^wi (平30) は「太いもので打つ」、犂 h₂ (平69) は「細いもので打つ」な

ど。rǐe (上68) は「太鼓をたたく。」③ I mǐe (上68) mvi (平69) mbieh (上35) 精気が変り逝く：II nah (平17) ndžu (平28)

phinz (平32) 驅鬼者が孤を驚かす、phinz (平32) は「怖れさせ駭かす」の意。

I 3 ① ② ③ 犂犂犂犂犂犂犂犂 新年が至り、黒頭・赤面は、国宴を開く

II ① ② ③ 犂犂犂犂犂犂犂犂 先卜が到来し、黒頭・赤面は、国筵をはる

① I kǐew (平45) siǐew (平46) ki (平30) kheh (上33) 新年が至る：II si (平10) wiǐe (平74) ni (上28) tǐe (平61) 先卜が到来する。

②③は三二頁—参照。西夏は、十二月で年が替った。

I 4 ① ② ③ 犂犂犂犂犂犂犂 若輩長老は、三竹の骨

II ① ② ③ 犂犂犂犂犂犂犂 若老は、三才竹の節骨

① I tǐe (上54) n^wi (平30) 若輩、rar (平80) kir (上72) 老長：II th^wi (平78) nd- (上72) ar (上72) 若老。② I re (上39) 三：II sǐ

(平70) s^wi (平10) 三歳。③ I n^wi (上72) 竹の節：II rǐ (平70) tsiar (平78) rir (平86) 竹の節骨。

七三

十一

この『月々楽詩』の文章は、いかにも簡潔で、文法もしたがって他の文章に比べて単純である。第一にいわゆる格助詞がほとんど使われていない。それ故、その意味を正確に把握し難いところが出てくる。しかし、西夏文字で書かれた西夏語には、二つの語彙層があったことを、この詩は如実に示している。この二つの層の語彙は、原則として混用されることがなかったと見てよい。たとえば二月の詩の中で、Ⅰの表現の **𐽀𐽁** *re* (上66) **𐽀𐽂** *phiu* (上2) 「道際」は、Ⅱの表現の **𐽀𐽃** *sia* (平19) **𐽀𐽄** (上49?) 「路辺」と対照される。この *re* (上66) は抽象的な道で *sia* (平19) は歩く路とも考え得るけれども、この *re* (上66) と **𐽀𐽂** *phiu* (上2) は同じ語彙層に属し、一方、*sia* (平19) と **𐽀𐽄** (上49?) はもう一つの層の語彙であったから、もし **𐽀𐽄𐽀𐽅** *on* とか **𐽀𐽆𐽀𐽂** *phiu* と並べると、西夏人には奇異に聞えたに違いがない。

いままで、Ⅰの層の語彙を「難しい表現」、Ⅱの層の語彙を「易しい表現」と呼んで扱って来た。そして、Ⅰは「黒頭」(遊放民)の言葉、Ⅱは「赤面」(農耕民)の言葉に該当するのではないかと推測したが、それよりも蓋然性の大きいもう一つの推測も成立する。それには十一月の詩の第三句がよい示唆を与えてくれる。即ち、**𐽀𐽇** *hie* (平61) の階層の西夏語がⅠであり、**𐽀𐽈** *nif* (上10) の部族の西夏語がⅡであったと見る推測である。この *hie* (平61) を「羌」と訳することもできるが、西夏の支配階級を指したと考えた方がよい。

『文海雜類』にこの *hie* (平61) が登録されていて、その解説がある。

フレとは、**𐽀𐽉𐽀𐽋𐽊** *dzih* 也、**𐽀𐽌** *sh*・ニャク也、西夏人の意

𐽀𐽇𐽀𐽈𐽀𐽉𐽀𐽋𐽊、**𐽀𐽈𐽀𐽉𐽀𐽋𐽊**、**𐽀𐽈𐽀𐽉𐽀𐽋𐽊**

hlɛ²dzin と min (上10) と min (上28) hnɪa₂ (上18) と、「黒頭」と「赤面」がどのようにつながるのか、いまは明らかではないが、本論のはじめにあげた「夏聖根讃歌」の「夏」がやはり hlɛ であって、その歌が、西夏の支配階級の系譜を述べたものであることは間違いない。同じように **𐰇𐰺𐰽𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚** 「国友より西夏の徳が高い歌」と題する讃歌もあって、hlɛ はいつも讃えられている。hlɛ が黒頭と通じる可能性も考え得るけれども、別の西夏の歌で、黒頭と赤面は、共に軽く扱われていることが多いのである。たとえば

- 1 𐰇𐰽𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚 天下の白鶴は、黒□(のごとく) 愚か
- 2 𐰇𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚 皇下の黒頭は、□より凡
- 3 𐰇𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚 地上の人・参は、申の耳(さる)(のごとく) 厚(補注2)く
- 4 𐰇𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚 陸上の赤面は、熊より聾

「白鶴」は黒頭の、「人参」は赤面のそれぞれエピテートである。一行目の四字と五字 non (上47) hnɪa₂ (平21) と二行目の hlɛ₂ (平30) は、同じ動物の名前で、たぶん熊の一種を指すと考えられるが、具体名をいまは認定できない。三行目の六字目は本来「聴く」hlɛn (平42) の意味であるが、ここでは「耳」と訳した。

黒頭と赤面に関する記述は、西夏文献からなお種々議論ができるが、それは別の機会に譲って、つぎに語彙の二層に関連した言語学的特徴について、もう少し付け加えておきたい。

まず本来方向指示の機能をもった動詞の接頭辞について考察してみよう。この接頭辞がⅠの表現には全く使われていないと大変面白いのであるが、実際にはⅠにもⅡにもこの接頭辞は出てくる。しかし、頻度からみると、Ⅱの表現で、圧倒的に多く使われる。その上、Ⅱの表現では、この接頭辞の本来の機能がなお生きていたと考えられるのである。

筆者は、「西夏語動詞句構造の考察⁽³⁵⁾」の中で、これらの接頭辞に、つぎの機能を設定した。

- 1 𪛗 ʔa-V 上方へ(向って)
- 2 𪛗 nah-V 下方へ(向って)
- 3 𪛗 ɬi-V 話者に近づく方へ(向って)
- 4 𪛗 wiŋ-V 話者から遠くの方へ(向って)
- 5 𪛗 ndaŋ-V 内側に(向って)
- 6 𪛗 ɬi-V 外側に(向って)

この『月々楽詩』の中で、たとえば三月の詩と四月の詩に、Ⅰの表現とⅡの表現は、つぎの対照を示している。

三月の詩

四月の詩

- | | | | |
|----------------|----|--------------|----|
| Ⅰ 𪛗 tʃhiw-theŋ | 語り | 𪛗 tʃhiw-theŋ | 語り |
| Ⅱ 𪛗 ɬi-mbiŋ | 鳴き | 𪛗 ɬi-mbiŋ | 鳴き |

同じⅠの表現(接頭辞なし)に対して、Ⅱの表現では、ɬi-とʔa-の二つの接頭辞を使い分けている。これは、三月では「(外に向って) 鳴く」、四月では、「(上の方で) 鳴く」を意味したと解釈できる。

五月の詩と六月の詩に、

- | | | | |
|--------|---------|------|-----------|
| Ⅰ 𪛗 ɬi | 降る | 𪛗 ɬi | (東方に) 逝く |
| Ⅱ 𪛗 ɬi | (雨が) 来る | 𪛗 ɬi | (東方より) 来る |

の対照がある。五月の詩は「雨が(下の方に向って) 来る」と解釈すべきであり、六月の詩では「東から(話者の外側に) 来る」の意味と見る。また十一月の詩の中で、Ⅱの表現にある「来り往く」は、

- Ⅰ 𪛗 ɬi 𪛗 ɬi 𪛗 ɬi
来り往く 来り往く 来り往く

Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗 来り往く

「話者の外側に来たり、話者から遠くに離れて行く」の意味にとりた。それに該当するⅠの表現では、接頭辞は使われていない。

『月々楽詩』の中で、最も多種類の接頭辞が使い分けられているのは、動詞 *toh* (上42) 「出る」である。

(i) Ⅰ 𪛗𪛗𪛗𪛗 青草が至る

Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗 夏季が出る *pa-toh*

「夏の季節が(上の方に)出て来る」(四月の詩)

(ii) Ⅰ 𪛗𪛗𪛗𪛗 独り独り歩を進め

Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗 各々或は出て *ki-toh*

「各々が(話者の方に近づいて)出て」(八月の詩)

(iii) Ⅰ 𪛗𪛗𪛗𪛗 見えるものは白い

Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗 前に出す *wih-toh*

「話者から遠くの方へ出す」(二月の詩)

(iv) Ⅰ 𪛗𪛗𪛗𪛗 馳ける(ところ)は広く長い

Ⅱ 𪛗𪛗𪛗𪛗 満足が出る

「内側に満足が出る」(七月の詩)

動詞 *wah y3w* (平35) 「往く」も、三種類の接頭辞が使われている。

(i) Ⅰ 𪛗𪛗 逝く (ii) Ⅰ 𪛗𪛗 往還する

Ⅱ 𪛗𪛗 往く *nah-* (十月の詩) Ⅱ 𪛗𪛗 往く *wah-* (十一月の詩)

(iii) Ⅰ 𪛗𪛗 歩行する

Ⅱ 𪛗𪛗 往く *h-* (二月、五月の詩)

これらの例も、それぞれ「(下の方に向って) 往く」「(話者から離れて) 往く」「(外側に) 往く」の意味に解釈できる。

Ⅰの表現とⅡの表現で、同じ接頭辞が使われていることがある。十月の詩で、

Ⅰ 𪛗𪛗 息む *wih-tq*

Ⅱ 𪛗𪛗 休む *wih-ndien*

共に「話者らが離れた方向で休む」の意味であろうか。

八月の詩の中で

Ⅰ 𪛗𪛗 稲は実を結ぶ *rir-ndah-ma*

Ⅱ 𪛗𪛗 穀物は熟す *sih ndah-m^wvi*

Ⅰ「(内側の方に) 実は結ぶ」、Ⅱ「(内側の方に) 熟して行く」。

またⅠの表現とⅡの表現で異った接頭辞が与えられている場合がある。九月の詩に

Ⅰ 𪛗𪛗 錢貫を串す *nah-*

Ⅱ 𪛗𪛗 袋ごとに盛る *wih-*

Ⅰ「(下に向って) 串く」、Ⅱ「(話者から離れて) 袋に盛る」。四月の詩にある上述のⅠ「青草が至る」とⅡ「夏季が出る」の対照も、この例に属する。

そのほかには、Ⅰの表現には接頭辞がなく、Ⅱの表現のみに使われている例が多い。Ⅱの例を単発的にあげると、

𪛗𪛗

(下の方に) 開く

𪛗𪛗

(下の方に) 寝る

𪛗𪛗

(下の方に) 還る

𪛗𪛗

(下の方に) 語る

𪛗𪛗

(下の方に) つなぐ

𪛗𪛗

(下の方に) とかす

𪛗𪛗

(話者の方に) 愛す

𪛗𪛗

(話者の方に) 打つ

𪛗𪛗

(話者から離れて) 咲く

𪛗𪛗

(話者から離れて) 拡げる

𪛗𪛗

(内側へ) 切り取る

𪛗𪛗

(内側へ) 穿つ

𪛗𪛗

(内側へ) 放つ

𪛗𪛗

(内側へ) 散る

𪛗𪛗

(外側へ) 繞り行く

𪛗𪛗

(外側へ) 妨げる

これらの接頭辞の使い方は、別の根拠から推定した機能とおおよそ合致しているように思える。そのことは、この詩が作られた時点で、とくにⅡの表現、つまり当時のミ語において、これらの接頭辞はなお本来の方向指示の機能をもってプロダクティブに使われていた、少くとも、その機能上の差異が書き手の意識の中に残っていたことを意味する。

つぎに、Ⅰの表現ではなく、Ⅱの表現のみに使われる形態に、**𪛗**型動詞がある。これはチベット語の—byed (…する。日本語の名詞+する動詞にあたる) と通じるから、とくにチベット語系的な形態と言える。⁽³⁶⁾ たとえば、一月の詩や四月の詩などに現われる**𪛗**「宴をなす」(名詞+𪛗(平10)↓動詞)がそれである。

一月Ⅱ

𪛗𪛗

始める

五月

Ⅱ

𪛗𪛗

学習する

六月Ⅱ

𪛗𪛗

飛ばす

十一月

Ⅱ

𪛗𪛗

真直に判断させる

など、いずれもⅡの表現に限られる。あとの二例は、他動詞・使役動詞としての意味を与えている。

十二

以上論じて来た西夏語における語彙の二層の弁別は、この言語の系統論と大に関わる問題である。仮りに、Ⅰの語彙層を西夏語Ⅰとし、Ⅱの語彙層をもつ言語を西夏語Ⅱとすると、西夏語Ⅰは、SOV型の語順をとるほか、N↑Adj型であり、動詞が持定の方向指示接頭辞をとる点は、西夏語Ⅱと一致するが、語彙の面では、西夏語Ⅱとはかなり違っていて、チベット・ビルマ語系の言語とほとんど関連しない。ところが何度も述べたように、西夏語Ⅱの方は、語彙の面でもチベット・ビルマ語系の言語と極めて近いのである。とくに、ロロ・ビルマ語系の言語と木雅語をはじめとするいわゆる西番語群の言語との間に、同源語が多量に認められる。いまの段階では、西夏語と木雅語などの言語と本格的な比較研究が完成していないけれども、両者の構造面に認められる親近性は疑うことができない。とくに、最近報告されている川西走廊言語の中で、貴琼 (gui³³ch³³) 語、爾蘇 (e⁵⁵su⁵⁵) 語 (東部方言 (爾蘇)、中部方言 (多統)、西部方言 (栗蘇))、爾龔 (rgu) 語、木雅 (mu⁵⁵ŋa⁵⁵) 語、納木依 (na⁵⁵mu⁵⁵zɿ⁵⁵) 語、史興 (ʃɿ⁵⁵hɿ⁵⁵) 語との間に顕著な共通点の存在が期待される。

この中、木雅語は、Minyak 語と呼ばれ、ずっと以前に B. H. Hodgson が今の四川省西北地域を調査した折、少数の語彙を収集し、sian (西番) 語群と呼んだ⁽³⁹⁾。のちに王静如⁽⁴⁰⁾と F. W. Thomas⁽⁴¹⁾ がその語彙に注目したが、資料が不足していたため、西夏語との関係を組織的に研究することができなかった。ごく近い将来に、西夏語と西番語群の言語の比較研究は急速に進展し、両者の間に共通する面、相違する点が、詳細に検討されるものと期待できる。

その作業が本格的に開始されるに先立って、その前工作として、西夏語自体をより詳しく分析し整理しておかなければならない。

西夏語の音形式については、ほぼ正確に復元できる枠組が出来上っている。確実に推定できる根拠を欠く文字は、新しい資料が出現しない限り、手のつけようがない。形態構造のレベルも、統語構造の面も、なお不確定な未解明の部分は残っているけれども、大体は再構成されている。したがって、主要な点は、語彙構造の系統的な整理にあると考えてよい。それにはもっと多量のテキストを消化し、未解読の文字を減少させる必要がある。

残された膨大な文献の量から言っても、西夏語は、いまやチベット・ビルマ系言語の中の最重要言語の一つになった。その言語系統的な位置づけは、簡単には結論付け得ないであろうけれども、その研究にとって、ここで提供した詩の構成面に反映された語彙の二層は重要な意味をもって来る。そして、この『月々楽詩』につづいて、『礼詩文』、『大詩』、『道理詩』、『智慧詩』に関する同様な研究を早期に完成しなければならない。

- (1) 最近の海外の西夏語研究として、つぎの書物が刊行されている。
Е. И. Кычанов: *Вновь Собранные Драгоценные Парные Изречения*, Москва. 1974 (『新集錦合道理』(格言集)の研究) K. B. Кепинг: *Сунь Изы, В тангутском Перевод*, Москва 1979 (西夏文『孫子』の研究) K. B. Кепинг: *Дес Категорий, Угра-ченная Китайская Лэйшу в Тангутском Перевод*, Москва 1983 (西夏文『類林』の研究) K. B. Кепинг: *Тангутский Язык, Морфология*, Москва 1985 『西夏語・形態論』史金波、白滨、黄振華『文海研究』中国社会科学出版社、北京、一九八三(書評 西田龍雄『東洋学報』六五卷、三・四号、一九八四)。
- (2) 西田龍雄「最近の西夏語研究」『泊園』第二十四号、泊園記念会、昭和六十年九月。
- (3) 西田龍雄「西夏語動詞構造の考察」西田編『チベット・ビルマ諸語の言語類型学的研究』(昭和五十九年度科研報告書) 昭和六十年三月、本論文の付録として掲載した。
- (4) 『孫子』の西夏文は、上掲ケピン氏(一九七九)の書物により、漢文は、金谷治訳注『孫子』岩波文庫によった。
- (5) 西田龍雄『西夏文華嚴經』Ⅱあとがき『西夏訳経雜記』一九七六、京都大学文学部 参照。
- (6) この動詞の変形については、「聞く」を代表として、拙著『西夏文字』(一九六七)にあげている。その後『西夏文華嚴經』Ⅰ、Ⅱ、あとがき『西夏訳経雜記』同Ⅱにおいても、この問題を論じた。
- (7) 上掲注(1)『文海研究』参照。
- (8) 現代羌語は、孫宏開編著『羌語簡志』(民族出版社、一九八一)によっている。
- (9) 王静如「新見西夏文敦煌安西洞窟夏漢文題記考釈」『王国維學術研究論集』第一期、上海、華東師範大学出版社一九八三。
- (10) 史金波・白滨「莫高窟、榆林窟西夏文題記研究」『考古学報』一九八二、三期。
- (11) 西田龍雄「天理図書館蔵西夏文『無量寿宗要經』について」『ビブリ

掲注12)を見られたい。

(35) 本論文付録。

(36) 『西夏文華嚴經』IIあとがき「西夏訳経雜記」参照。

(37) ロロ・ビルマ系言語との同源語については、西田龍雄「多統訳語の研究」(松香堂、一九七三)および『保僱訳語の研究』(松香堂、一九七九) Tatsuo Nishida: Hshisia, Tosu and Lolo-Burmese languages, "Studia Phonologica" X 1976. T. Nishida: The Hshisia, Lolo and Moso languages. *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: The State of the Art*, Papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday, *Pacific Linguistics*, Series C-No. 87. 1985.

(38) 孫宏開「川西走廊区語言」『西南民族研究』四川民族出版社、一九八三、「六江流域的民族語言及其系屬分類」『民族學報』第三期、雲南民族出版社、一九八三、木雅語については、その後、黃布風「木雅語概況」『民族語文』一九八五、三期が発表されている。なおアルス語については、拙文「新しい言語と新しい文字—中国四川省のアルス語とアルス象形文字」『言語』一九八三、一月号を見られたい。

(39) B. H. Hodgson: *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet*. London 1874, reprint 1972 Amsterdam.

(40) 王静如「論四川羌族及弭約語与西夏語」『西夏研究』第二輯 一九三三
(41) F. W. Thomas: *Nam, An ancient language of the Sino-Tibetan Borderland*, Oxford Univ. Press, London, 1948, 1951.

〔補注1〕

第四と第七が同じ形で出て来るのは、奇怪な印象を与える。月の序数①第四 $\eta^w\eta i$ と②第七 $\eta^w\eta i$ 、男子の序列③第四 $\eta^w\eta i$ と④第七 $\eta^w\eta i$ は、いずれも平声八十四韻に属し、『文海』の枠組では、『同音』(新版)と一致して、①②④が小類16、③が小類15に入る。小類15と16には違った反切上字が使われているが、両者は系聯するから、筆者は16類と15類は同じ形

式であったが、15類の方が後代平去声になったと推定した。つまり、月の序数は、複合形式として第四と第七は弁別され、男子の序列の場合は、四と七は、後代声調によって弁別されたことになる。(西田龍雄「西夏語韻図『五音切韻』の研究」下、参照)。

〔補注2〕

ここで人・参と訳したのは、『掌中珠』の中で、この文字が、星宿名「人星」と「参斜」にあてられているためである。なお、『文海』平声十七韻に、つぎの注がある。𐵓𐵔𐵕𐵖𐵗𐵘𐵙𐵚𐵛𐵜𐵝𐵞𐵟𐵠𐵡𐵢𐵣𐵤𐵥𐵦𐵧𐵨𐵩𐵪𐵫𐵬𐵭𐵮𐵯𐵰𐵱𐵲𐵳𐵴𐵵𐵶𐵷𐵸𐵹𐵺𐵻𐵼𐵽𐵾𐵿「人・参也、赤面之意也」

〔追記〕

ここで難かしい表現といったIの層の語彙を、雅語もしくは文語として認定してしまうと、事は簡単らしく見えるが、実はそうではない。そのように考えると、十一世紀のはじめに西夏国が文字を創作したとき、すでに雅語あるいは文語が確立していて、一般の語彙と同じレベルで、それらに対する文字を考案したことになる。また、雅語や文語であるとなると、王陵の碑文がなぜIの難かしい表現で書かれなかったのか、大きい疑問として残る。

西夏文字六千数百字の中、ある部分の文字は一般の文献にはほとんど使われていなかったため、その正体をつかめなかったが、ここで紹介した一連の詩の中で、はじめて姿をあらわしたのである。その語彙層がどこにつながるのか、その来源が問題なのである。

西夏語動詞句構造の考察

I

西夏語の動詞句構造には、まだまだ解明されていない部分が残されている。この一文において、筆者は西夏語の動詞句構造を全般的に取り上げて論じるつもりはないが、その中で動詞接頭辞の問題と人称接辞の問題を中心に考察してみたいと思う。

はじめにはっきりと述べておかねばならないのは、西夏語の文法形態は、テキストによってかなり相違している点である。接頭辞や人称接辞あるいはそのほかの助詞を頻繁に使うテキストもあれば、あまり多く使わないテキストもある。『大方広華嚴經』や『慈悲道場懺法』など經典の多くは後者の例であるが、經典の中でも『法華經』や『金光明經懺悔滅罪伝』などは『孫子』や『類林』^①と同じように前者の類に属する。

なぜテキスト間にそのような相違があるのかの理由については、いろいろと推測ができる。たとえば、後者は、擬漢文調の簡潔ないわば翻訳文体であるのに対して、前者は、西夏語本来の姿を示しているとか、両者は、地域的に違った方言もしくは階層的に違った言語を反映しているなどが考えられるであろう。あるいは別の見方から、後者は、漢文にならって西夏文章語として発展したものであり、前者は、それに対してより口語的な形態を代表する文体であったと解釈することも可能

であろう。

そのような理由はさておいて、西夏語の詳しい動詞句構造をさぐる上で、後者のテキストはあまり役に立たない。あり得た西夏語の文法形態を考察するには、あとにあげたより複雑な使い方を記録した資料に依存するよりほかはないのである。まず、動詞句構造のもっとも基本的な形態を示しておく。

接頭辞—

動詞語幹— 接尾辞

[方向指示 時制・アスペクト指示 状態指示]	A 形 式	[人称指示 法 指 示]
	B 形 式	

- 1 基本形² 動詞語幹に何もつかない形

来³ *laŋ* 来る 飲⁴ *thiŋ* 飲む

- 2 断定形 後⁵ *liŋ* (平29)

断定をあらわす *liŋ* は漢語の…也にあたり、『文海』『文海雜類』の注などによく使われる。ビルマ文語の *-lei* *-liy*、アツイ語の *-a* と同源語であろう。³ 真言中に用いる也

- 3 終了形 終⁶ *-tshia* (上16) …し終る。

文⁷ *-tshar* へ…し終る…にあたる形で、おそらくそれと同源語であろう。

- 4 使役形 V 使⁸ *-phih* (平11)

V (自主) 終⁹ *-wi* (平10)

語幹に -*phih* をつける使役形は頻用されるが、動詞が自主動詞の場合、*-wi* による使役形も少なくない。⁽⁵⁾ **待** *phih* 飲ませる。 **度** *shia-wi* 手をしばらせた。

5 人称接辞形 行為者あるいは受動者を代名詞の形で動詞語幹のあとにつける。V は動詞語幹を代表する。

基本形 * V **能** ↓ *V_B* **能** *hah* 一人称

* V **能** ↓ *V_B* **能** *nah* 二人称

使役形 * V **能** ↓ *V* **能** *-phich-hah* 一人称

* V **能** ↓ *V* **能** *-phich-nah* 二人称

人称接辞は動詞語幹を B 形式にかえる (p. 111)。使役形では、使役助動詞 *phih* は変形するが、動詞語幹自体はそのまま A 形式を使う。

待 *thah sien-phih* 成仏せしめる

待 *thah sien-phich-hah* 成仏せしめる (我は)

6 接頭辞形 方向指示と完了相を示す

務 V *ʔa* V 上の方へ

能 V *wih* V あちの方へ

能 V *ki* V こちらの方へ

能 V *nah* V 下の方へ

能 V *ndah* V 水源 (内側) へ

能 V *hir* V 下流 (外側) へ

待 *phih*

あとで述べるように、これらの接頭辞の方向指示機能は、一つの推定であって、それらすべてが同時に完了相を示すと断定できるかどうかは問題が残るが、この接頭辞1をとまなう形式は、いずれもそのまま連体修飾形として使われる。

7 接頭辞形2

接頭辞形2は、話者の願望・祈求などを表現する。

𐀓	V	^h eh (平36)	V	願う、望む	(上の方に?)
𐀔	V	wēh (上32)	V	願う、望む	(あちらの方に?)
𐀕	V	keh (平36)	V	願う、望む	(こちらの方に?)
𐀖	V	neh (上33)	V	願う、望む	(下の方に?)
𐀗	V	ndeh (上33)	V	願う、望む	(内側に?)
𐀘	V	rīe (上38)	V	願う、望む	(外側に?)

これらの接頭辞は願望表現という共通する機能をもっていたと考えられるが、本来は接頭辞形1に相応する方向指示の機能を含んでいて、方向によって相互に弁別されていたものと考えられる。

ʔa-: ʔeh-, wiŋ-: wēh-, ki-: keh-, naŋ-: neh-, ndaŋ-: ndeh-, rir-: rīe-

いまの段階で古い機能を確認することはむづかしいが、それらは接頭辞形1と融合した形であったことは確かである。

8 否定形式

𐀙	V	mīh (平11)	V	行為の否定、状態の否定
𐀚	V	meh (上33)	V	行為の勃発の否定
𐀛	V	mī (平30)	V	可能性の否定

慨影翳𪛗

鼓せずして、自から鳴る

殷纘纘𪛗

未だ顕現せざるにより

紉𪛗𪛗𪛗

功德は量り得ず（功德無量）（弥勒上）

なお *ti* をとる動詞句は、*ti* と動詞語幹の間に指示代名詞 *tshih* を要求することが多い。その代名詞 *tshih* が先行の何を受けるかは、動詞の性格〔自主、不自主〕によって決められる。これについては後述する。

9 禁止形式

𪛗 V *tih* (平 *ti*) V

𪛗𪛗 *tih-sōh* 起すな

本来 *ti* につづく動詞語幹は B 形式を使ったが、A 形式があらわれる使用例も多い。

𪛗𪛗𪛗 *tih-wich-nah* 汝は作る勿れ（B 形式）

以上、西夏語の基本的な動詞句形式を数種列挙してみた。この中、接頭辞形式 1 および接頭辞形式 2 と人称接辞形式を中心に、以下具体例をあげて検討したい。

II

一九六六年に筆者が『西夏語の研究』^⑥を公刊した折に、西夏語の動詞語幹につく接頭辞六種の存在をはじめて指摘した。それらの単位を接頭辞としたことと、六種の単位を一つのセット（動作態）として扱った点で意義があったと思う。しかし、それらの接頭辞がもつ機能を単にアスペクト表示と推定した理解には不十分なところがあった。そこではつぎのような

機能を推定していた。

- | | | | | |
|---|---|------|-------|-----------------------|
| 1 | 拵 | ʔa | (?) | 既然態(すでにその状態になっている) |
| 2 | 罷 | wih | (上27) | 終結態(その状態が終結する) |
| 3 | 𪔐 | ki | (平30) | 將然態(まさにその状態になろうとしている) |
| 4 | 𪔑 | ndaŋ | (上17) | 進行態(その状態で進行している) |
| 5 | 𪔒 | riŋ | (上77) | 動作の客体を示す |
| 6 | 𪔓 | naŋ | (平20) | 充滿する状態と下に向う方向を示す |

その後、ソビエトのソフロノフ氏は、これらの接頭辞を、時制表現とアスペクト表現に解釈した(『タングート語文法』1968⁽⁷⁾)。wih, riŋ, ndaŋ の三つを過去時制とし(しかしその結果は現在にも続いている)、ʔa は瞬間相、ki は完了相、naŋ は起動相を表現するものとしている。

またそのほかに時制として、動詞が表現する動作が過去において発生し、その結果が現在時に全く影響しない遠過去があり、**𪔒**、**𪔓**の後置によって表現されたと考える。

この接頭辞の機能をめぐる問題は、その後ソビエトの西夏学者 K. B. Kepping 女史によって、大きく発展させられた⁽⁸⁾。ケピンは、タングート語動詞の接頭辞の基本的意味はアスペクトではなく、動作の方向であったとする。しかし本来の意味は次第に失われて、それぞれの動詞につけられ完了相を示す指標となったと言う。ここで重要な指摘は、接頭辞は動詞語幹と相補的な分配関係にたつとして、接頭辞の各形式は同じ脈絡ではあらわれて来ない点である。つまりそれぞれの動詞語幹には、唯一つの接頭辞しか許されないとする。

接頭辞をもつ形ともない形の弁別をはっきりさせるために、**𪔒**をともなう動詞形を例につぎのような解釈を与えてい

る。

接頭辞なし 接頭辞つき

- | | | | | | |
|---|------|-----|--------|--------|----------|
| 1 | 𐌲𐌹 | 越える | 𐌲𐌹𐌺𐌹 | 越えた | 動作の結果を示す |
| 2 | 𐌲𐌹𐌺𐌹 | 追う | 𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹 | 追いはじめた | 動作の開始を示す |
| 3 | 𐌲𐌹𐌺𐌹 | 出る | 𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹 | 現われた | 単一の動作を示す |
| 4 | 𐌲𐌹𐌺𐌹 | 執る | 𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹 | 獲得した | 条件の変化を示す |

ほかの五種の接頭辞もすべて **𐌲𐌹** と同じ機能をもっていた。つまり接頭辞＋動詞形は、実際には動作の結果や動作の開始や単一の動作などを、つけられる動詞の性格に応じて、どれか一つの意味を表現したと考える。

そしてケピン女史は、以上の考察から、つぎの三つの結論を出している。

- 1 タングート（西夏）語動詞の接頭詞は、（動詞語幹と）相補的分布を示す。
- 2 それらは同じ一つの文法範疇——完了相を示す。
- 3 それらは状態動詞あるいは動詞＋法助詞、あるいは動詞＋助動詞構文以外は、すべての動詞の前にたち得た。

そして、それらの接頭辞はもともとは動作の方向を示したと想定し、**𐌲𐌹** は上の方に、**𐌲𐌹𐌺𐌹** は下の方に、**𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹** は向つてく

る方向を、**𐌲𐌹𐌺𐌹** は離れていく方向を示したと推定する。

筆者があとであげる例によっても、この方向づけの解釈はほぼ当たっていると思う。

𐌲𐌹𐌺𐌹 は、(1) 生命の喪失、(2) 戦争の敗北といった好まざる意味合を含んだ動詞の完了相を示し（たとえば **𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹** 殺してしまった、**𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹** 死んでしまった、**𐌲𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹** 負けてしまった、など）、**𐌲𐌹** は談話動詞の完了相あるいは少数の動作動詞の完了相を構成すると言う（たとえば **𐌲𐌹𐌺𐌹** 来た、**𐌲𐌹𐌺𐌹** 往った、**𐌲𐌹𐌺𐌹** 着いた、など）。

また馬氏は、*na-* に対立する *naŋ-* をソフロノフにしたがって、「始動体」とする。

1 𐰇𐰺𐰍𐰏𐰤𐰆𐰚𐰏𐰤

更新添十句

2 𐰇𐰺𐰍𐰏𐰤𐰆𐰚𐰏𐰤

酒酔而臥

3 𐰇𐰺𐰍𐰏𐰤𐰆𐰚𐰏𐰤

瀉置池中、水即弥満

4 𐰇𐰺𐰍𐰏𐰤𐰆𐰚𐰏𐰤

餓虎見菩薩頸下流血

これらの例も始動体というよりは、この接頭辞 *na-* が動作・状態が下の方に向っているその方向を指示していると見た方があたっている。1 新たに十句を（以下に）増加した。2 酒を飲んで（ごろりと）寝た。3 池の中にまくと（まきおろす）、ただちに充満した。4 餓えた虎は、菩薩の頸に血が（したたり）落ちているのを見て。

このように使用例の解釈には、いつも困難がつきまとうが、死語である西夏語には直接その言語を観察できる話手はいない。したがって、上述のように文献における使用の形態から、本来表現したであろう機能を推定するよりほかはないのである。

本稿の後半で、筆者の集めた具体例を基に、接頭辞形式1の機能について改めて考察するつもりであるが、それに先立って、方向指示と他の文法範疇のかかわり方の類型を、別の角度から検討してみよう。

III

動詞語幹に接頭される方向指示辞の存在は、いわゆる川西走廊言語において確認され、近年極めて重要視されて来ている。羌語、嘉戎語のほか、貴琼語、爾蘇語、爾龔語、扎巴語、木雅語、納木依語、史興語、普米語といった羌語系西番語グ

ループの言語、それにもっとも北に位置する白馬語には、いずれも方向指示の接頭辞があるから、西夏語にも同種の形態があっても決して不可解ではない。しかも普米語⁽¹¹⁾や羌語⁽¹²⁾では、それらの方向指示接頭辞と時制表現が関連していて、十二世紀西夏語とよく似た情況にある。これは極めて興味のある現象である。

方向指示辞を動詞語幹に接頭する言語を類型的に考察するに当って、筆者は、つぎのような基準を設定するべきであろうと考えている。

I 方向指示と時制(アスペクト)表現との関係。方向指示辞が過去時制(あるいは完了相)や非過去時制(あるいは不完了相)と関係なく使われるか否か、つまり方向指示辞がどの時制にも使われるかそれとも一方のみか、今のところ過去時制のみに方向指示辞が使われる言語はわかっているが、非過去時制のみに使われる言語の存在はまだ報告されていない。

II 方向指示接頭辞と動詞語幹の配分関係。この関係に制限があるか否か、つまり同じ一つの動詞語幹が、数個の接頭辞をとり得る形態と唯だ一つの特定の定った接頭辞しかつかない形態があり得る。後者の場合は、本来違った音形式と異った機能をもった数個の接頭辞の間に、古い機能を統合した別の共通した機能が生れたと考えることは十分可能である。

羌語系西番語グループに属する多くの言語は、上述の二つの基準に対していずれも制限は認められず、方向指示の機能は時制表現とは別に生産的に活動している。それに対して普米語をこの基準からみると、⁽¹³⁾

I 過去時制のみに方向指示接頭辞が使われる。

II 同じ一つの動詞語幹は種々の方向接頭辞をとり、それらの接頭辞の機能は対立する。sto 55「見る」に対して、te 55 sto 55「上の方を見た」、nee 13 sto 55「下の方を見た」、khe 13 sto 55「外の方を見た」、xe 13 sto 55「内の方を見た」のように、

一つの動詞は数個の接頭辞をとり得て、違った方向指示を与えることができるが、それは同時に過去時制表現として機能す

る。

羌語（桃坪方言）では方向指示接頭辞は、

I 過去時制と非過去時制両方に使う。

II 八種の形の接頭辞が同一動詞語幹につき得るが、主語が三人称の場合、過去表示の助詞 *ləŋ* は省略されて、方向指示の接頭辞は、もはや特定の方向指示ではなく、過去表示という機能を同時に果たことになる。

te 31 *phu* 55 上の方に逃げる

ar 31 *phu* 55 下の方向に逃げる

zɿ 31 *phu* 55 逃げて帰る

da 31 *phu* 55 逃げて行ってしまう

u 55 *phu* 55 上流の方へ、内の方へ逃げる

sɿ 55 *phu* 55 下流の方へ逃げる

xge 31 *phu* 55 後の方へ、反対の方へ逃げる

xa 31 *phu* 55 逃げ出して行く、外の方へ逃げる

te 31 *ke* 51 (彼は) 行った

xa 31 *dzi* 241 (彼は) 言った

te 31 *bza* 15=13 (樹は) 大きくなった。

ある地域では、後者の用法の接頭辞は、*pa-*形式に統一されて、過去表示の機能を果たすと報告される。

羌語方言は、接頭辞の方向指示から時制表示への移動の過程を示していて重要である。

嘉戎語では、上述の二基準はつぎのようになる。⁽¹⁵⁾

I 過去時制と非過去時制両方に方向指示接頭辞が使われる。

II 動詞語幹と方向指示接頭辞は厳しく制限されていない。もちろん、坐るには下方への接頭辞のみが、立ち上るには上方へのみが許されるといった自然の制限はある。

多続語も方向指示と時制表現はそれぞれ独立する。⁽¹⁶⁾

I 過去時制・非過去時制いずれにも方向指示接頭辞は使える。

II 七種の接頭辞が同じ一つの動詞語幹について、動作の方向を種々指示する。

de 55 hto 55 跳び上る

ue 55 hto 55 跳び下る

kue 55 hto 55 水源の方向に跳ぶ、内側に跳ぶ

ne 55 hto 55 下流の方向に跳ぶ、外側に跳ぶ

khuar 33 hto 55 山手の方向に跳ぶ、左側に跳ぶ

ɲua 33 hto 55 川手の方向に跳ぶ、右側に跳ぶ

ɲu 55 hto 55 うしろに跳ぶ、跳んで行く

つまり方向指示専用の接頭辞があって、時制表現とは離れて、生産的に使われている。これが西番語グループの一般的な形態である。

このグループの各言語の形態を指示方向の種類とともに、つぎに表示しよう。⁽¹⁷⁾

言語名	方向指示 辞の数	特定の動詞 語幹に配分 される	過去時制のみ に使われる	指 示 する 方 向
貴 琼	6	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 話者より外の方へ、4 水源(内)の方へ、5 話者の方へ、6 もとの場所 に返る、反対の方に行く (上述、多統語)
爾 蘇	7	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 上流(内)へ、4 下流(外)へ
爾 龔	4	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 内へ、4 外へ
扎 巴	4	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 水源(内)の方へ、4 下流(外)の方へ、5 川手の(話者より離れる) 方へ、6 山手の(話者の方に向う)方へ
木 雅	6	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 水平に進行
納 木 依	3	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 外から内へ、4 内から外へ、5 もとの場所に返る(話者の方へ) 6 話者 から離れる
史 興	6	N O	N O	1 上方へ、2 下方へ、3 過ぎ行く、4 過ぎ来る、5 外へ、6 内へ
普 米	6	N O	Y E S	1 下流から上流へ、2 上流から下流へ、3 上方へ、4 下方へ、5 外から内へ、6 内から外へ、 7 もとの場所に返る、8 周辺から中心へ
白 馬	8	N O	N O	

この言語群の基本的な指示方向範疇は、上表から見て、

a 上方へ 対 下方へ

b 水源(内)の方へ 対 下流(外)の方へ

c 山手の(話者に向う)方へ 対 川手の(話者から離れる)方へ

の三つの対立であったと判断できる。

そして川西走廊言語において、方向指示接頭辞が、非過去時と過去時両方に使われ、独自の方向指示機能をもった第Ⅰ段階(爾蘇語、木雅語などが代表)から、方向指示の機能をもちながら、過去時制に使われるときには、方向指示の機能を時制表示の機能に替える第Ⅱ段階(羌語が代表)、そして最終的に、過去時制のみに使われてしかも接頭辞が特定の動詞語幹

に配分され、本来の方向指示の機能を全く失い、過去時制指標になる第Ⅲ段階（羌語方言が代表？）に発展することはよく理解できる。

筆者は、西夏語の形態は、この第Ⅱと第Ⅲの間、どちらかと言えば第Ⅲに近い段階にあったと考えている。

筆者は、この方向指示接頭辞の存在は、使役態構成接頭辞 *ʃ-* の存在と密接に関連して考える必要があると思う。嘉戎語は、方向指示接頭辞—使役接頭辞—動詞語幹のように *ʃ-* を語幹に密着させるが、嘉戎語以外は、その二種の接頭辞を配置の上で互に排除し合う方向に進んだ。ほとんどの言語は、方向指示接頭辞をなくするか、あるいはそれを保存した場合、別の使役態構成辞を語幹のあとに作り出していった。

方向指示接頭辞 使役接頭辞

有り	有り	嘉戎語
----	----	-----

有り	無し	羌語、普米語、爾蘇語、木雅語など
----	----	------------------

無し	有り	独龍語、景頗語など
----	----	-----------

嘉戎語はやはりTB言語の中で、もっとも古い複雑層を代表しているのであろうか。

IV

西夏語の各接辞の機能を、近隣言語とくに川西走廊言語における方向指示接頭辞機能から、音形式の類似に基いて推定するのは危険である。たとえば

普米語 *ne* 13- : 西夏語 *naŋ-* 下の方に

khe 13- : ki- 外の方に

などを対照でき、中には同じ起源の方向接辞があるにしても、大体において方向辞はそれぞれの言語特有の形式をもつことが多い。やはりまず西夏語自体の使用例に頼って、その機能を推定しなければならない。

西夏語において動詞語幹と六種の接頭辞がどのように分配されるかを探究するためには、同一のテキスト内部における現われ方を知ることが好ましい。しかし、実際には、同一の動詞語幹で、六種の接頭辞すべてをとっている例はなく、ほとんどの動詞は特定の一つの接頭辞を使い、二種以上を使い分けした例は、稀れである。

まず *pa-* についてみると、

旃後務復

pa-r̥ior

双手をあげて

脇報務復

pa-r̥ior-wi

家門をあげさせて

務紀

pa-vor

……より起る

散亨散斂斂復

pa-s̥iŋ

三晩置いておいたら、生き返って(来た)

この *pa-* にはいろいろの用法があったと考えられるが、上掲例についてみる限り、*pa-* は、動作がへ上方に向っていることを指示するものと解釈してよからう。

pa- がへ上方に向う方向を示すのに対立して、へ下方に向う方向を示すのが *naŋ-* である。
さきにあげた例のほかに、

報辨報斂

naŋ- h̥i(?)

門前にて馬を降り(錦合道理)

殺斂斂斂斂

naŋ- d̥ziŋ

屠殺した生物たち(金光)

斂斂斂斂

naŋ-ʔ

聾になり語らず(金光)

などもやはり〈下の方向〉を示すものと見たい。

これらの接頭辞を含む動詞句は、第二の例にあるように、いずれも連体修飾の役割も果している。

禪仏教に関するテキストのアンソロジーである『三代属明言集文』（レニングラード所蔵刊本）の中に、つぎの頌がある。¹⁸

坐家（在家）頌

坐家（在家）頌

定った死を思い

定った死を思い nah-ndien si

皆に願う心とて無し

皆に願う心とて無し

此処に人の心は休まる

此処に人の心は休まる

直々に攻撃すること勿れ

直々に攻撃すること勿れ

この nah- はやはり〈十分に〉とか〈下の方に〉を表現していて、「もう定ってしまった（ところの）自分の死の運命を考えてみると」のように、それを含む動詞句はつくづく死を修飾することになる。

この nah-ndien は 収収 ki-ndien と対立する。後者は特定の接頭辞が固定してしまって、副詞として使われる形で、「必ず」を意味し、頻繁に出てくる。

『三代属明言集文』の別のところにも、同じ nah-ndien があらわれるから、「定る」の主要接頭辞は nah- 〈下の方に〉であったことがわかる。

収収 収収 収収

立つ処が定り、根は動かず

接頭辞 3) wi- と 4) ki- を、筆者はさきに述べたように以前それぞれ終結態と将然態を表現すると推定した。これを基本的な方向対立のモデルから推測すると、1) va- 上方と 2) nah- 下方に対して、3) wi- と 4) ki- の相違いは、ケピンが考えるように、3) 話者から離れる方向と 4) 話者に近づく方向にあったと解釈することは可能である。

たとえば **從從** *wih-tch* 〈…から出た〉の *wih-* は、出てくる方向を示していると考えるか、それとも「出る」という動作が、方向とは離れて、すでに終了したと見るかは、かなり違っている。そこでその両方を、この接頭辞 *wih-* があらわしているとするのも一つの考え方である。たとえば **從從** *wih-tar* は「過去」にあたるが、逐字訳すると、流れ去った(時)の意味で、ある時点から(1)離れていく方向に、過ぎ去って(2)しまった(時)と表現されていると考えればよい。ところがそのような考え難い例もある。つぎ例、

𪛗𪛗從從

人間の中に生れた

𪛗𪛗從從

畜生の中に生れた

これらはへ人間に向って生れた」とかへ畜生に向って生れた」とは解釈にくい。

ki- は、*wih-* に対して、行為が話者の方に向って来ることを示すという想定は、かなりの範囲に使用例を説明する。たとえば動詞語幹 *-loh* 〈帰る〉がこの二つの接頭辞をとる例をうまく解釈する。

𪛗𪛗從從從從

wih-loh

塔に敬礼して帰る (大莊嚴)

𪛗𪛗從從

ki-loh

速に還る (法華經)

𪛗𪛗從從

ki-loh

かの父が帰る (法華經)

1 *wih-loh* は、話者の方から離れる方向で帰っていく

2 *ki-loh* は、話者の方に向って来る方向で帰って来る

そこでは方向指示は、非常に明瞭である。

ki- と *wih-* の対立は、『三代属明言集文』の中に収められる「寂寂歌」にも認められる。

𪛗𪛗從從

𪛗𪛗從從

天も亦無く 地も亦無く

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

近來もなく過去もなく皆無

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

無無跡が尽れば觀処はいづく

この *wi-* はやはり話者に近づく方向を示すと解釈すると、「*ki-meh* 近くにやって来るものも無、*wih-meh* 遠くに過ぎ去ったものも無」のように、この文意はとれる。

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

wih-dzi

狼が食べれば、餌の余りを置き（餌をたべのこし）

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

盗人がはこべば、足跡が有り（足跡をのこす）

のような例では、やはり終結した状態を示していると見るべきで、そこでは方向性はわからない。

また〈坐る〉を意味する動詞語幹には、*wih-* が使われる。

𪛗𪛗𪛗

wih-dzu

ここに坐って（大莊嚴）

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

生き返り、速に坐り（金光）

これは話者の方から離れるように第三者が坐ることを表現しているのであろうか。これに対して、〈下の方に向って坐る〉
𪛗𪛗 *nah-dzu* の存在が当然期待できる。実際に、*ndah-dzu* がある。

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

師子座に坐したまえるを見て（法華經）

『新集錦合道理』の中に、

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

wih-tsiōn

針の穴には、糸が貫き

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

wih-dzu

婚家には、嫁が坐る

これは話者との方向指示というよりは、その動作が終結し安定している当然の状態を表現していると見るべきであろう。
siuh 〈…の如く〉がつねに *wih-* を要求するのもそのためである。

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

wiñ-siuf

日輪の如し

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

夢見る如し

〈夢見る〉を ki-miēh と表現する。ここで 𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮 を使うのは、夢が自分のもとにやって来るという意味であるかも知れない。また、

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

ki-cch

門の中に入った

これは上述の原則から見ると、〈入って行った〉ではなく、〈入って来た〉と解釈すべきであろうけれども、確証できない。

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

ki^h-džé 差わされ……のところに行った。これは、〈閻羅王に派遣されて来て、……のもとに行

った〉と見るのが正しいことになる。『金光明經懺悔滅罪伝』の脈絡でそのようにとれる。

『法華経』で、

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

ki-n^w-uñ

知るところなし

𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮

wiñ-sen

察するところなし

の例があるが、両者が ki- と wiñ- に使い分けられているのは、〈知る〉は近づき、〈察する〓思う〉は離れると理解されているためであろうか、中心的な部分には、確かに話者との方向の原則を適用できても、全体の使用例にはなお解決し難いところが残る。

主に 𑖦𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮 を接頭する動詞

見る、視る、聞く、知る、流れる、来る、教える、告げる、住む、求む、夢見る、獲る、集める、差わす、倍する、入る。

主に wiñ- を接頭する動詞

行く、離れる、生れる、出る、思う、似る、飲む、坐る、読む、取り出す、収める、縛る、くくる、還る、経る、越える。

もう一つのセット *ndah-* と *rir-* の機能も決め手に乏しい。

祀祀護脣訛悔多

蕨
肭
肭
肭

〈走る〉には ndah₁ を、〈来る〉には hi₁ を使う。

基本対立のモデルから見て、残りの一つの方角指示の対立、水源か下流かに起源をもつ内側か外側かの原則を、この接頭辞の中心部分に適用してみたい。

彙編

耗散護衛

翻
翻
能
翻
翻
護
翻

弱靡席。祿蕞。取筵。勃。瓶。修。

これらはいずれも内側の方向を示すものとして解釈できないことはない。同じ『金光明經懺悔滅罪伝』にある

龍藏經

УДК 62-50

縱報龍龍蕞瓶鹿嗷弓發龔

なども、内側の問題として理解できる。

一方、 $\frac{1}{2}$ には、

薩
薩
龍
龍
龍
龍

誦能訛訛終

hir-wi

この人は重罪をなせり

誦能訛訛終

hir-ishien

即ち由縁を説く

誦能訛訛終

hir-sin

繩を以て挽く

などは、それに対して、いずれも外側にはたらきかける行為と見做せる。

主に ndah- を接頭する動詞

死ぬ、咎める、住む、怠る、歓喜する、往く、易える、取る、殺す、もつ、与う、問う、癒える、顕現する、失う、変える、尽きる、終える、なる、勝るなど。

主に hir- を接頭する動詞

来る、説く、為す、挽く、往く、叫喚する、引導する、集める、待つなど。

また、訛訛 hir-ma 当頃（しばらく）、

訛訛

hir-ni 乃至のように、

へ多くなるへ至る」と hir- を結合した形が、副

詞、接続詞として、多くのテキストで使われている。hir-ni は、訛訛 hir-ni へ至った」と対立する。

以上の考察からわかるように、西夏語の動詞接頭辞がもった方向指示機能は、十二世紀には必ずしも明確ではなかった。

十二世紀から十三世紀にかけて、西夏語は、さきに述べた西番語グループの言語の発展段階で言えば、すでに第Ⅲ段階に近く到達していたものと考えられる。そして西夏語は、動作の方向指示を、むしろ話者との関係で、動詞語幹のあとにへ来るへ行くを添加する方式に進展していた。たとえば、『華嚴經』の中に見られるように、

訛訛

wiēn-lah

生れ来る

訛訛

ni-zi-sin

集め行く

訛訛

wā-lah

放ち来る

など、漢文に合わせた表現ではないへ来るへ行くを動詞語幹につけた形が使われている。これは、T-B言語の一つの自

然な発展方向であったと考えられる。たとえば *wa-lah* には、ビルマ文語 *hlwat-la-san* が対応する。しかし他方、西夏語は、より遡った段階では、方向指示機能が生産的であって、そのほかの部分にも侵透していたのではないかと考える根拠がある。

つぎにそれについて考察を進めたい。

V

接頭辞形式2は、話者の願望・祈求を表現する形式であると考えられるが、そこにもやはり六種の形式を弁別できる。それらの形式は相互にどのように相違したのか、いままで明瞭にできる根拠がなかったが、その音形式をみると、上述の方向指示の機能をもつ接頭辞形式1と対応することがわかった。

まず、それらの形式の照応関係を示してみよう。

接頭辞形式1

接頭辞形式2

1	<i>ʔa-V</i>	上方へ	..	𐰇𐰣	<i>ʔeh-V</i>
2	<i>nah-V</i>	下方へ	..	𐰇𐰤	<i>neh-V</i>
3	<i>ki-V</i>	話者に近づく方へ	..	𐰇𐰥	<i>keh-V</i>
4	<i>wih-V</i>	話者から遠のく方へ	..	𐰇𐰦	<i>weh-V</i>
5	<i>ndah-V</i>	内側へ	..	𐰇𐰧	<i>ndeh-V</i>
6	<i>ri-V</i>	外側へ	..	𐰇𐰨	<i>ri-V</i>

この照応関係は、偶然とは考え難い。『同音』の流風音類で（旧版、新版共に）、*ŋ* と *ŋe* が「互用の注」の関係を示すところから、この二種の接頭辞形式は、密接な関係をもっていると考えた。

接頭辞形式2には *-eh* を含む形式が多く、初頭子音が両系列に共通するから、これらの接頭辞形式を、*ŋe: r-* と母音に分析できる可能性がでてくる。しかし、接頭辞形式2は各子音のみの対立が方向を示して、それに願望・祈求を表現する *-eh* が結合した形とは考えずに、上述の方向を指示する接頭辞形式1が *-eh* と融合した形と考えたい。この二種の接頭辞形式が関連しているとすると、接頭辞形式2は、本来は話者の願望・祈求が向けられる方向指示を含んでいることになる。その方向指示は実証し難い推測になるが、具体的な接頭辞形式2の使用例をつぎに若干あげておきたい。

1	𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>ŋe-ti</i>	三夜放置せんとす（金光）
	𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>ŋe-^hdzeŋ</i>	世間に住まんと望み（金光）
	𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>ŋe-^hyiŋ</i>	訴訟する者を求めんとする（金光）
2	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>ŋe-^hzi-tshar</i>	今日懺悔し、速かに除滅せんと願う（慈悲）
	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>ŋe-rar, ŋe-r̄rar</i>	…経を書き、分明に罪を懺悔するも（金光）
3	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>keŋ-ni</i>	百年に至るを願う（觀世音）
	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>keŋ-ziŋ-mih</i>	たとえ国城妻子を布施せんとするも（法華經）
4	𐄎𐄎𐄎	<i>weŋ-tch</i>	出さしめよ（弥勒）
	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>weŋ-^hdziŋ-mbiŋ</i>	皆な法に随い指揮を望む（金光）
	𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎𐄎	<i>weŋ-seŋ</i>	一塵を一劫に換えて算えん（法華經）

5 𪛗𪛗𪛗𪛗

ndeŋ-phi

怨心を捨るべし（金光）

𪛗𪛗𪛗𪛗

ndeŋ-kié

速かにここに引き来るべし（金光）

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

ndeŋ-wi

わが両手をもと（の如く）ならしめん（法華經）

6 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

rié-tshieh-wi

説かしめられんことを願う（法華經）

𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗

rié-tshieh

この經の功德を説くとも（法華經）

さきに述べたように、動詞語幹には常用する接頭辞1が大体定っていたと見てよいであろう。接頭辞1は動詞語幹の音形式によって限定されたものではなく、同系言語の形態から判断して、やはり本来方向指示の機能をもったものであって、その中の一つが安定した結果と推測できた。たとえば **𪛗** tshieh〈言う〉には、**𪛗** rié-tshieh〈言った〉のように使われた。その願望・祈求形もやはりその接頭辞が関係して、**𪛗** rié-tshieh〈言ってほしい〉の形をとった。したがって両者の関係が

i rié-tshieh

ii *rié-?eŋ-tshieh → rié-tshieh

のように解釈して、後者を融合形式と見るのは自然であろう。

同じように、**loŋ**〈返る〉には **wiŋ-loŋ** と **ki-loŋ** の二つの形があった。前者の方向指示をもつ祈求形へ返ってほしいは、

i wiŋ-loŋ

ii *wiŋ-?eŋ-loŋ → weŋ-loŋ 𪛗𪛗

の形をとる。

諸々の分身の仏をして、各々本土に還らしめたまわんと願う（法華經）

同様に **藏續** ndah-wi 〈なつた〉 に対する **祈禱** ndeh-wi 〈ならしめん〉 は、その祈求形であり、**藏續** wiñ-tch 〈出た〉 に対する **牧娘** weñ-tch 〈出てほしい〉 は、同じ方向指示を含んだ祈求形式である。

それぞれ *ndah-?eh-wi → ndeh-wi, *wiñ-?eh-tch → weñ-tch のように分析できる。

このように願望・祈求形は、ある動詞語幹に ?eh を前置し、さらにその前に方向指示の接頭辞をとり、その二つの接頭辞が融合して出来た形であると言える。その融合形である接頭辞形2六種を特定の西夏文字で書き表わしたために、その関係は隠されていたのである。

一般化してその関係を示すと、つぎようになる。

接頭辞1 + 動詞語幹

方向指示形

*接頭辞1 + ?eh + 動詞語幹

接頭辞2 + 動詞語幹

願望・祈求形

もし常用の接頭辞と合わない祈求形があったにしても、それは、その動詞語幹がもともと常用形ではない接頭辞1の形式をとり得たことを証明しているにすぎない。たとえば lah 〈来る〉 の常用接頭辞は **rir** であったが、その祈求形に、**祈禱** ndeh-lah の形をとる例がある。

能觀能祈禱

彼の菩薩に来てもらう（とき）（法華經）

この事実、lah は **rir** 以外に、もともと ndah- の方向指示接頭辞もととり得たことを示している。

lah : rir-lah

ndah-lah

↓
*rir-?eh-lah → rië-lah

↓
*ndah-?eh-lah → ndeh-lah

このように祈求形に二形式があっても、不可解ではない。

西夏語のこの融合の形態は、まさに現代羌語の形態とほぼ一致するのである。

孫宏開氏の記述によると、羌語の祈求形は、二人称に三人称が何かの動作をすることを要求する場合、 $\text{h}^1\text{a}^1\text{a}^1$ を動詞の前につける。

$\text{no}^55 \text{ ze}^{241} \text{ lie}^{33} \text{ ne}^{31} \text{ tha}^55 \text{ le}^53 \text{ i}^{31} \text{ ra}^{13} \text{ xue}^{33} \text{ la}^{33}$

あなたは病気だから、彼に洗ってもらったら||あなたに「彼が洗うことを」望む。

この ra^{13} の前に、方向指示辞を付け得る。その場合、方向指示辞と祈求形は合一して、一音節となる。

$\text{tha}^55 \text{ le}^55 \text{ qe}^55 \text{ tha}^55 \text{ le}^55 \text{ za}^{51} \text{ ly}^{33}$ 彼がよろしい、彼に来させて下さい。

この za^{51} は、 $\text{z}^1\text{a}^{55} \text{ ra}^{13}$ の融合形で、 z^1a^{55} は、山手に行く||話者の方に向って来る方向を指示する。

$\text{tha}^55 \text{ le}^55 \text{ kai}^55 \text{ sa}^{15} \text{ ke}^{33}$ 彼に行かせるべきだ

この例の sa^{15} は、 $\text{s}^1\text{a}^{31} \text{ ra}^{13}$ の融合形であり、 s^1a^{31} は、下流の方向を示している。

また羌語には、一人称が二人称に、自分がある活動することを許してもらう場合、動詞語幹の前に $\text{ti}^1\text{a}^1\text{a}^1$ をつける形態がある。そして動作の方向を示したい時には、方向指示接頭辞の前方に、さらに祈求接頭辞 $\text{ti}^1\text{a}^1\text{a}^1$ を加える。

$\text{no}^55 \text{ mi}^55 \text{ qe}^55 \text{ so}^{31} \text{ qa}^55 \text{ thi}^{33} \text{ te}^55 \text{ rua}^{31}$ 君はよくないから、私に手伝わしてくれ

この形は、 thi^{33} + 方向接頭辞 + 動詞語幹の順に並べられる。西夏語には、この形態は認められないが、上述の六種の接頭辞体系からはみ出る祈求形 ndi^1 は、あるいは、この thi^{33} に対応するのであろうか。

𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄

$\text{ndi}^1\text{-}\text{seh}$

飲むものを求む (金光)

𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆

$\text{ndi}^1\text{-hl}^w\text{if}$

この経典をとるべし (法華經)

川西地域言語の中の爾蘇語や爾龔語では、融合されない形かもしくは方向指示接頭辞自体が、同時に命令・祈求の機能を果している。

西夏語は、それらの言語に比べて、より古い興味のある形態を保存していたことになる。

VI

西夏語動詞句の人称接辞

西夏語の動詞句でかなりの動詞語幹が人称を代表する接尾辞を要求することは、すでによく知られた事実である。その接辞は一人称と二人称しかない。

一人称 Verb-**𐽀** -hɣaŋ

二人称 Verb-**𐽁** -naŋ

三人称 Verb ○

Keeping は二人称接辞を単数形と複数形に分けて、つぎの形をあげているが、²⁰⁾筆者はこの意見に賛同しない。

単数 𐽁 naŋ (上17) 接辞形 𐽁 naŋ (上17) 汝

複数 𐽁 niŋ (上10) 𐽁 niŋ (上10) 汝等

文字 **𐽁** に字形 **𐽁** が含まれるのは、いままでは後者つまり数詞二 **hniŋ** (平32) を音符とするためとばかり考えていたが、実は二を意符としたものであって、この代名詞はもともとは双数であった可能性が大きいことに気付いた。もし、複数であればなぜ二を含んだのか理解し難い。実際のテキストでは単数に使われることが多く、複数には、**𐽁𐽁** **niŋ-niŋ** があ

らわれる。

また **訖** を人称接辞と見るのは、いろいろの文脈を検討すると無理であると判断せざるを得ない。たとえば『金光明経懺悔滅罪伝』の中で「汝自身（**訖**）の行くところの道に「怨家は」来りて待つ。**讎** **訖** **讎** **讎**（到着すれば即ち）唯だ王法が嚴峻であるのみならず、かの怨家と **讎** **訖**（遇う・汝は）とき、躑躅の苦しみをどのようにして **訖** **訖**（脱するか・汝は）」の一節がある。まずこの **ni** を、人称接辞とすると、二人称単数でなければならぬし、実際あとで二回共 **-nah** が使われている。したがって、この **ni** は仮定の助詞と考えるべきであらう。（cf. WRT. ni）

この人称接辞と関連して、極めて重要な事柄が浮上して来た。この人称接辞がつく場合、動詞語幹が変形するという事実である。当初筆者は「聞く」〈得る〉の特定の動詞にしかこの事実があること以外には気が付かなかったが、もっと多くの動詞にもこの変形が見られることがわかって来た。

つまり西夏語の動詞は人称接辞を要求しただけではなく、動詞語幹自体を変形したのである。たとえば、如是我聞は西夏語では是如聞我となるが、あとに我がつくことによって聞の動詞語幹は **訖** **ni**（上）から **訖** **ni**（平）に変わる。同様に

訖 **ni**（平）〈得る〉は **訖** **ni**（平）に

訖 **ni**（上）〈得る〉は **訖** **ni**（上）にそれぞれ変形するのである。

訖 **ni**（上）〈得る〉は **訖** **ni**（上）にそれぞれ変形するのである。
方便を以て活路を得る・我は（金光）

訖 **ni**（上）〈得る〉は **訖** **ni**（上）にそれぞれ変形するのである。
解脱を得るべし・汝は（法華經）

この事実は、西夏語の動詞句構造の非常に大きい特徴として考えねばならない。

本来の動詞語幹をA形式、人称接辞に先行する語幹をB形式と、筆者は呼んでいる。⁽²⁾

このB形式は、禁止形の助詞のあとや祈求の接頭辞 **ni** のあとにも現われるほか、使役の助動詞 **phih** 自体も形を変え、

B形式 phich をもっていたことが、近年わかってきた。

攷 ndi-hlu 取るべし

攷 tih-wich-nah 汝は作る勿れ

攷 ʔa-sʷi-nah 汝は起せり

攷 sʷi (平10) は、字形上類似する **攷** vor (平89) のB形式ではなく、**攷** soh (平48) のB形式であると考えられる。

攷 ti-sōh 発願 **攷** ti-ʔa-sōh 願を発する

攷 ti-ʔa-sʷi-nah 願を起せば(汝が)

禁止の助詞 tih- のあとで、B形式ではなくA形式を使っているテキストもある。

攷 sien-phih 仏とならしむ

攷 sien-phich-hyah 仏とならしむ・我は

この対立は明瞭であって、後者は phih+ch の融合形であると推測できる。B形式には ch を含む融合形が多い。『同音』の注にも、A形式とB形式の対立を示したのも少なくない。たとえば **攷** ndiŋ (上10) は注字 **攷** ndeh (上33) をもつ。つぎの使用例を見ると、本字はB形式、注字はA形式であったことがわかる。

攷 leh-meh-ndeh 未だ曾って見ず

攷 leh-meh-ndih-hyah 怨報を未だ曾って見ず・我は

中国の西夏研究家史金波氏は「西夏語的存在動詞」と題する論文を発表して、十一種²³の存在動詞を弁別したが、その中で少くとも **攷** と **攷** は同一動詞語幹のA形式とB形式として理解しなければならぬ形である。後者は代名詞接辞をもつ場合以外には、単独には出て来ない。A形式 **攷** ʔɛzɛh (上32) B形式 **攷** ʔɛzich (上44)

この二字は『同音』では互用の注で、Aの注はB（左）、Bの注はA（右）の形をとっている。
代表的なA形式とB形式の対立をあげておく。

A形式

B形式

𪛗	hi ^w ia (平11)	𪛗	hiu (平58)	取る
𪛗	wi (平10)	𪛗	wia (平51)	作る、なす
𪛗	tshieh (平39)	𪛗	tshih (上12)	説く
𪛗	kiur (平76)	𪛗	kiun (平72)	盛る
𪛗	leh (上33)	𪛗	li (上9)	見る
𪛗	kh ^w on (平56)	𪛗	khien (平42)	与える
𪛗	sieh (上35)	𪛗	sen (上41)	思う

動詞語幹につく人称接辞が、上掲例のようにその動作をする主体を指すことが多いが、そうではなくてその動作の客体を示すと解釈しなければならぬ場合がある。たとえば『金光明経懺悔滅罪伝』に、**𪛗𪛗𪛗𪛗** ki-ne-huān の例がある。この文はつぎのような文脈で使われている。「張居道は、自からなした罪は重く免れ難いが、これより自分の怨家と遇わないよう、また閻羅王の嚴法から離れるための方便に何があるか、私に教えて下さいと言う」

ここでは -huān は教える対象である。このような解釈は、先行する動詞がA形式であることによって成立するのではないか、同じように、**𪛗𪛗𪛗𪛗** ndah-sih-nah 地上に汝を行かせた（再び生路に帰す）の -nah は行かせる客体である。この sih はやはりA形式であろう。

それらに つぎの例でも、使役の助動詞 phih は、はっきりとしたA形式である。

𐰇𐰆𐰏𐰚𐰚𐰏𐰚

我をして彼に敬礼せしむ

一つの仮説として、この考え方を試してみたい。

VII

つぎに西夏語の動詞句の中の興味のある事実をもう一つ加えよう。

それは西夏語の動詞句で代名詞がかかわりをもつもう一つの形態である。動詞語幹に接頭される 𐰇𐰆 tshih がそれで、

これは本来指示代名詞であって、〈それ、其〉を意味した。その使用例は非常に多い。たとえば『新集錦合道理』の中に、

𐰇𐰆𐰏𐰚𐰚𐰏𐰚 𐰇𐰆𐰏𐰚𐰚𐰏𐰚

米の中に石が有れば、百年焚けども、飯に未だそれはならず

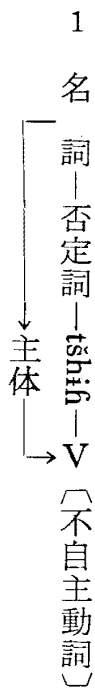
𐰇𐰆𐰏𐰚𐰚𐰏𐰚 𐰇𐰆𐰏𐰚𐰚𐰏𐰚

心の中に悪が有れば、億の業を修めども、道は未だそれを得ず

この二つの文は対をなしているが、この使用例からわかるように、この代名詞が出てくるのは、𐰇𐰆 (上30) による否定文に限られるのである。𐰇𐰆には多くの場合、漢語の未があたり、否定詞 𐰇𐰆 不と 𐰇𐰆 未に対立する。〈決して……ではあり得ない〉とその可能性を否定するものとして使われる。

さらにこの構文で重要なことは、動詞の性格の相違によって、tshih が代表する対象が異なる点である。動詞が不自主動詞(自動詞)のときは、tshih は動作の主体であり、自主動詞(他動詞)の場合は、客体を示している。

tshih を含む動詞句をもつ文を図式的に表示すると、



- (1) 『孫子』には К.Б. Кеппинг: *Сунь Цзэ, В Тангутском Перевод*е Москва 1979. があり、『類林』には К.Б. Кеппинг: *Лес Категорий, Утраченная Китайская Ляйшу в Тангутском Перевод*е. Москва, 1983 がある。
- (2) 本稿で使う西夏語再構成音形式は、筆者が以前示したのと多少相違するところがある。新しい形式は、拙稿『西夏語韻図『五音切韻』の研究』上、中、下『京都大学文学部研究紀要』第二十～二十二、昭和五十六～五十八年を見られたい。
- (3) アツイ語は、戴司郎『アツイ語基礎語彙集』アジア、アフリカ言語文化研究所、東京一九八二参照。
- (4) 以前この文字の再構成形を誤っていた。以後 tshia に改める。
- (5) この二種の使役形については、拙著『西夏文華嚴經』Ⅱ、あとがき pp. 26- (京都大学文学部刊)を見られたい。
- (6) 座右宝刊行会、東京、一九六四、Ⅱ一九六六。
- (7) Софронов, М. В. *Граматика Тангутского языка*, 2 vols. Москва 1968.
以下西夏文字の発音は、すべて筆者の再構成形式で示した。
- (8) Kepping, A Category of Aspect in Tangut (E. Grinstead 訳), *Acta Orientalia* 33 pp. 283-294. Copenhagen.
- (9) 馬忠建『西夏文法研究』(一九七八級研究生畢業論文、中国社会科学院研究生院) 未公開。
- (10) 孫宏開『川西走廊地区語言』『西南民族研究』四川民族出版社、一九八三、四二九—四五四頁。『六江流域的民族語言及其系属分類』『民族学報』第三期、雲南民族出版社、一九八三・一二(実際には一九八四・一二に刊行) 昆明。後者には重要な資料が提供されている。
- (11) 陸紹尊編著『普米語簡志』北京、民族出版社、一九八三。
- (12) 孫宏開編著『羌語簡志』北京、民族出版社、一九八一。
- (13) 『普米語簡志』による。
- (14) 『羌語簡志』による。
- (15) 長野氏の調査したギャロン語卓克基方言では、方向指示接頭辞は完了態のみにつく。長野泰彦「ギャロン語の方向接辞」『季刊人類学』一五・三、一九八四、三—五二頁。筆者のコメント五八—七〇頁を参照されたい。ここでは瞿鑑堂「嘉戎語概況」『民族語文』一九八四・二による。
- (16) 孫宏開「爾蘇(多統)話簡介」『語言研究』一九八二、二期、二四—二六四頁。
- (17) 孫宏開上掲注(10)のあとの文献による。
- (18) 筆者がレニングラード滞在中に筆写したノートによる。『西夏文華嚴經』Ⅱあとがき、三二—頁を参照されたい。
- (19) Е.И. Кычанов, *Вновь Собранные Драгоценные Плащные Изречения*, Москва, 1974 所収のテキスト『新集錦合道理』による。
- (20) Kepping, Subject and Object Agreement in the Tangut Verb (J. Matisoff 訳) *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, Vol. 2 Num 2. pp. 219-237.
- (21) 西田龍雄『西夏文字』一九六七年版、一九四頁—、一九八〇年版一九六頁—。
- (22) 西田龍雄『西夏文華嚴經』Ⅱあとがき一一頁—。Ⅲあとがき二五八頁—参照。
- (23) 『語言研究』一九八三、二期、二一五—二二八頁。